

重右衛門の最後

田山花袋

青空文庫

一

五六人集つたある席上で、何ういふ拍子か、ふと、魯西亜ロシヤの小説家イ、エス、ツルゲネーフの作品に話が移つて、ルウヂンの末路や、バザロフの性格などに、いろく興味が多い批評が出た事があつたが、其時なにかといふ男が急に席を進めて、「ツルゲネーフで思ひ出したが、僕は一度獵夫手記れふしゆきの中にもありさうな人物に田舎ゐなかで邂逅でつくはして、非常に心を動かした事があつた。それは本当に、我々がツルゲネーフの作品に見る魯西亜の農夫そのまゝで、自然の力と自然の姿とをあの位明かに見たことは、僕の貧しい経験には殆どほとんど絶無と言つて好い。よく観察すれば、日本にも随分アントニイ、コルソフや、ニチルトツフ、ハーノブのやうな人間はあるのだ」と言つて話し出した。

二

まアずつと初めから話さう。自分が十六の時始めて東京に遊学に來た頃の事だから、も

う余程古い話だが、其頃麴町の中六番町に速成学館といふ小さな私立学校があつた。英学、ドイツ独逸学、数学、漢学、国学、何でも御座れの荒物屋で、おも重に陸軍士官学校、幼年学校の試験応募者のために必須の課目を授けるといふ、今でも好く神田、本郷辺の中なかどほり通に見るまことにつまらぬ学校で、自分等が知つてから二年ばかり経つて、其学校は潰れてしまひ、跡には大審院の判事か何かが、その家を大修繕して、裕かに生活して居るのを見た。けれど其古風な門は依然たる昔の儘で、自分は小倉の古袴の短いのを着、肩を怒して、得々として其門に入つて行つたと思ふと、言ふに言はれぬ懐かしい心地がして、其時分のことが簇々と思ひ出されるのが例だ。で、何うして自分が其学校に通ふ事に為つたかと言ふと、夫は自分が陸軍志願であつたからで自分の兄は非常な不平家の処から、規則正しい学校などに入つて、二年も三年も懸つて修業するのなら誰にでも出来る、貴様は少くともそんな意気地の無い真似を為てはならぬ。何でも早く勉強して、来年にも幼年学校に入るやうにしなければ、一体男児の本分が立ぬではないか。と言つた風に油を懸けられたので、それで当時規則正しい、陸軍志願の学生には唯一の良校と言はれた市谷の成城学校にも入らずに、態々速成といふ名に惚れて、そのつまらぬ学校の生徒と為つたのであつた。今から思ふと、随分愚かな話ではあるが、自分はいくらか兄の東洋豪傑流の不平に感

化されて居つたから、それを好い事と深く信じ、来年は必ず幼年学校に入らなければならぬと頻りに学問を励んで居た。

忘れもせぬ、自分の其学校に行つて、頬に痣のある数学の教師に代数の初歩を学び始めて、まだ幾日も経ぬ頃に、新に入学して来た二人の学生があつた。一人は髪 of 毛の長い、色の白い、薄痘痕のある、背の高い男で、風采は何所となく田舎臭いところがあるが、其の柔和な眼色の中には何所となく人を引付ける不思議の力が籠つて居て、一見して、僕は少なからず気に入つた。一人はそれとは正反対に、背の低い、色の浅黒い瘦こけた体格で、其顔には極く単純な思想が顕はれて居るばかり、低頭勝なる眼には如何なる空想の影をも宿して居るやうには受取れなかつた。二人とも綿の交つた黒の毛糸の無意気な襟巻を首に巻付けて、古い旧い流行後れの黒の中高帽を冠つて（学生で中高帽などを冠つて居るものは今でも少い）それで、傍で聞いては、何とも了解らぬやうな太甚しい田舎訛で、互に何事をか声高く語り合ふので、他の学生等はいづれも腹を抱へて笑はぬものは無い。

「イツト、エズ、エ、デック」

とナシヨナルの読本の発音が何うしても満足に出来ぬので、二人はしたゝか苦しんで

居たが、ある日、教師から指名されて、「ズー、ケツト、ラン」と読方を初めると……、生徒は一同どつと笑つた。

漢学の素読そくの仕方がまた非常に可笑をかしかつた、文章軌範の韓退之かんだいしの宰相さいしやうに上たてまつるの書を其時分我々は読んで居つたが、それを一種可笑をかしい、調子を附けずには何うしても読めぬので、それが始まるといつも教場を賑にぎはすの種たねとならぬ事は無かつたのである。

ある日、自分が課業を終つて、あたふたとその学校の門を出て行くと、自分より先にその田舎の二人が丸で兄弟でもあるかの様に、肩と肩とを摩すり合あはせて、頻しきりに何事をか話しながら歩いて行く。

声を懸けようと思つたけれど、黙つて自分は先へ行つて了しまつた。

次の日も二人睦むつましさうに並んで行く。

矢張声を懸けなかつた。

次の日も……

又其次の日も矢張同じやうに肩を摩り合せて、同じやうにさも睦むつましさうに話し合つて行くので、彼等は一切何所どこに行くのか知らん、自分等の帰る方角に帰つて行くのか知らんと思ひながら、ふと、

「君達は何処どこです」

と突然尋ねた。

急に答は為せずに丁寧せいぜいに会釈えしゃくしてから、

「私わし等らですか、私等わたしらは四谷よつやの塩町しほちやうに居るんですがア」

と背の高い方がおづ／＼答へた。

「僕も四谷の方に行くんだ！」

と自分も言つた。其頃自分は牛込とみひさちやうの富久町とみひさちやうに住んで居たので、其処そこに帰るには是非

四谷の塩町は通らなければならぬ。否、四谷の大通には夜などよく散歩に出懸でかくる事がある

身の、塩町附近の光景には一方ひとかたならず熟して居る。玩弄屋おもちゃやの隣に可愛い娘の居る砂糖

屋、その向ふに松風亭といふ菓子屋、鍛冶屋かぢや、酒屋、其前に新築の立派な郵便電信局……。

二三歩歩いてから、

「塩町つて、……僕はよく知つてるが、塩町の何処どこです、君達の居る家は……」

「塩町の……湯屋の二階に来て居るんですア」

「湯屋つて言へば、あの角に柳のある？」

「左様さやうでがさア」

「それぢや僕も入つた事がある湯屋だ。彼処あそこには背の低い、にこくした妻君が居る筈はずだ」
「好く知つて居やすナア」
と驚いた様子。

「それぢや、いつでも僕が帰る道だから、これから一所に帰らうぢやありませんか」
「さう願へりや、はア結構だす……」

と背の低い方が答へた。

又二三歩黙つて歩いた。

「それで君達の国は一体何処です？」

「私等の国ですか、私等の国は信州ですが……」

「信州の何処どこ？」

「信州は長野の在でがすア」

「何時いつ東京こつちに来たのです」

「去年の十二月、来たんですが、山やま中んなかから、はア出て来たもんだで、為体えていが分らない
でえら困りやした」

「塩町の湯屋は親類ですか」

「親類ぢやありやしねえが、村の者で、昔村で貧乏した時分、私等の親が大層世話をした事がある男でさア。十年前に国元ア夜逃げする様にして逃げて来たゞが、今ぢやえら身しんだ代のう拵こしらへて、彼地あすこ処こでア、まア好い方だつて言ふたが、人の運て言ふものは解らねえものだす」

自分はこの時からこの二人に親しく為なつたので、段々話を為して見ると、言ふに言はれぬ性質の好い処があつて、背の高い方は田舎者に似合はぬ才をも有もつて居るし、又背の低い方は自分と同じく漢詩を作る事を知つて居るので、一月もその同じ道を伴つれだ立つて歸うちる中には、十年も交つた親友のやうに親しくなつて、互の将来の思想も語り合へば、互の将来の目的も語り合つて、時間の都合で一所に歸られぬ時は非常に寂さびしく感ずるといふ程の交情になつて了つた。自分は四谷御門の塵埃ほこりの間を歩きながら、幾度二人に向つて、陸軍志願を勧めたであらうか。幾度二人に漢学の修養の必要を説いたであらうか。自分は其頃兄に教はつて居た白文はくぶんの八家文はつかぶんの難解の処を読み下し、又は即席に七絶ぜつを賦ふして、大いに二人を驚かした。ことに背の低い山県行三郎やまがたかうざぶろうといふのは、自分の漢詩に巧たくみであることを知つて、喜んでその自作の漢詩を示し、好くその故郷ふるさとの雪の景色を説明して自分に聞かせた。自分の若い空想に富んだ心は何どんなにその二人の故郷の雪景色なるものを想像し

たであらうか。二人は言ふのである。自分の故郷は長野から五里、山又山の奥で其の景色の美しさは、とても都会の人の想像などでは解りこは無えだアと。否、そればかりではない、背の低い山県は学問の時間の間に、その古い手帳をひろげて、其処に描かれたる拙い一枚の写生図を示し、これが私の家、これが杉山君の家、こゝにこんもりと茂つて居るのは村の鎮守、それから少し右に寄つて同じ木立のあるのは安養寺といふ村の寺、私等の逃げて来たのは（かれ等は親の許さぬのに、青雲の志に堪へかねて脱走して来たのである）十二月の十三日の夜で、地上には雪が四五尺も積つて、その堅く氷つてる上に、月が寒く美しく照り渡つて、何とも言へない光景だつた。私は杉山君と昼間約束して置いたから、鎮守の向ふに行つて待つて居ると、やがて杉山君は遣つて来る。二人連れ立つて歩み出す。追手のかゝらぬやうに為るには何でも夜の中に長野に行つて、明日の一番の汽車に乗らなければならぬ。と言ふので、一生懸命に歩いたが、村が見えなくなつた時は流石に胸が少し迫つて、親達は嘸驚く事であらう。こんな無理な事を為ないでも、打明けて頼んだなら、公然東京に出して呉れるであらうと思つた……などといふ事を自分に話した。自分はいよゝゝ空想を逞うして、其村、その静かな山の中の村に一度は是非行つて見度いと、其頃から自分の胸はその山中の一村落に向つて波打つゝあつたので……。猶詳しく聞くと、そ

の村には尾谷川をたにがはといふ清い溪流けいりゅうもあるといふ。その岸には水車が幾個となく懸つて居て、春は躑躅つじ、夏は卯の花うの花、秋は薄すくきとその風情ふぜいに富んで居ることは画にも見ぬところである相さうな。又その村の山の畠には一面雪ならぬ蕎麦そばの花が咲き揃そろつて、秋風のさびしく其上を吹き渡る具合など君でも行つたなら、何んなに立派な詩が出来るか知れぬとの事。あゝ、本当ほんとうにその仙境はどんな処であらうか。山と山とが重り合つて、其処そこに清い水が流れて、朴訥ぼくとつな人間が鋤すきを荷になつて夕日の影にてくくと家路をさして帰つてゆく光景。それを想像すると、空想は空想に枝葉を添なへて、何だか自分の眼の前には西洋リイダーの読本フエリーの中の仙女の故郷がちらついて何うも為ならぬ。

三

二人の寄寓して居る塩町の湯屋の二階、其処そこに間もなく自分は行くやうになつた、二階は十二畳敷ふたたま二間で、階段はしを上つたところの一間の右の隅かたすみには、櫺げやきの眩てらく々した長火鉢が据たゑられてあつて、鉄てつの五徳ごとくに南部なんぶの錆さびびた鉄瓶てつびんが二箇ふたつか懸かつて、その後のちにしつかりした錠ぢやう前まへの附ついた総桐そうどうの箆たんす筒すがさも物々しく置かれてある。総へやじて室むろの一体いったいの装飾かざりが、

極く野暮な商人らしい好みで、その火鉢の前にはいつもでつぷりと肥つた、大きい頭の痘痕面の、大縞の襦袢を着た五十ばかりの中老漢が跣坐をかいて坐つて居るので、それが又自分が訪ねると、いつも笑ひながら丁寧に会釈を為るのが常であつた。この主人公が即ち二人の山の中から出身した昔の無頼漢なるもので、二十年前には村の中にも其五尺の身を置く事が出来なかつたのであるが、人間の運といふものは解らぬ者で、二十九歳の時に夜逃を為て、この東京に遣つて来て、蕎麦屋の垣夫、質屋の手伝、湯屋の三助とそれからそれへと辛抱して、今では兎に角一軒の湯屋の主人と成り済して、財産の二三千も出来たといふ、まあ感心すべき部類に入れても差支ない人間であつた。であるから自分の村の者と言へば、随分一肌抜いで、力にもなつて遣るので、その山の中から来た失意の人間は、多くはこれを使つて来て、三助から段々湯屋の主人に立身しようとして居る人間も随分あるといふ事だ。全体信濃のその二人の故郷といふのは、越後の方に其境を接して居るから、出稼といふ一種の冒険心には此上もなく富んで居るので、また現在その冒険に成功して、錦を故郷に飾つた例はいくらも眼の前に転つて居るから、志を故郷に得ぬものや、貧窶の境に沈淪して何うにも彼うにもならぬ者や、自暴自棄に陥つた者や、乃至は青雲の志の烈しいものなどは、恰も溪流の大海に向つて流れ出づるが如く、日夜都

会に向つて身を投ずるのを躊躇ちうちよしないのであつた。あゝこの山中の民の冒険心。

で、自分は愈いよくその山中の二人の青年と親しくなつて、果ては殆ど毎日ほとんのやうにその二階を訪問した。春はやゝ過ぎて、夕の散歩の好時節になると、自分はよく四谷の大通を散歩して、帰りには必ずその柳のある湯屋に寄つてみる。すると、二階の上から田舎の太神たいかぐ樂らに合せる横笛の音がれろろ、ひーひやらりと面白く聞えて、月がその物干台の上に水の如く照り渡つて、その背の低い山梟の姿が、明かな夜の色の中に黒くくつきりと際立きはだつて見える。

「おい、山梟君！」

と下から声を懸ける。

と……笛の音がばつたり止む。

「誰だか」

と続いて田舎訛あなかなまりの声。

「僕、僕、富山！」
とみやま

「富山君か、上あがんなはれ」

その物干台！ その月の照り渡つた物干台の上で、自分等は何んなにその美しい夜を語

り合つたであらうか。今頃は私等の故郷でもあの月が三峯の上に出て、鎮守の社の広場には、若い男や若い女がその光を浴びながら何の彼のと云つて遊び戯れて居るであらう。斑尾山の影が黒くなつて、村の家々より漏るゝ微かな燈火の光！ あゝ帰りたい、帰りたいと山県は懷郷の情に堪へないやうに幾度もいふ。自分も何んなにその静かな山中の村を想像したであらうか。

半年程立つた頃、自分は又その同じ村の青年の脱走者を二人から紹介された。顔の丸い、髪の前額を蔽つた二十一二の青年で、これは村でも有数の富豪の息子であるといふ事であつた。けれど自分は杉山からその新脱走者の家の経歴を聞いたばかり、別段二人ほど懇意にはならなかつた。杉山の言ふ所によると、その根本（青年の名は根本行輔と言ふので）の家柄は村では左程重きを置かれて居ないので、今でこそ村第一の富豪などと威張つて居るが、親父の代までは人が碌々交際も為ない程の貧しい身分で、その親父は現に村の鎮守の賽銭を盗んだ事があつて、その二十七八の頃には三之助（親父の名）は村の爲めに不利な事ばかり企らんでならぬ故いつそ筵に巻いて千曲川に流して了はうではないかと故老の間に相談されたほどの悪漢であつたといふ事である。それがあつた時、其頃の村の俄分限の山田といふ老人に、貴様も好い年齢をして、いつまで村の衆に厄介を懸けて

居るといふ事もあるまい。もう貴様も到底村では一旗挙げる事は難しい身分だから、一つ奮発して、江戸へ行つて皆の衆を見返つて遣らうといふ気は無いか。私などを見なされ、一度は随分村の衆に馬鹿にされて、口惜しい〜と思つたが、今では何うやらかういふ身になつて、人にも立てられる様になつた。三之助、貴様は本当に一つ奮発して見る気は無いか。と懇々説諭されて、鬼の眼に涙を拭き〜、餞別に貰つた金を路銀にして、それで江戸へ出て来たが、二十年の間に、何う転んで、何う起きたか、五千といふ金を攫んで歸つて来て、田地を買ふ、養蚕を為る、金貸を始める、瞬く間に一万の富豪！だから、村では根本の家をあまり好くは言はぬので、その賽銭箱の切取つた処には今でも根本三之助窃盗と小さく書いてあつて、金を二百円出すから、何うかそれを造り更へて呉れると頼んでも、村の故老は断乎としてそれに応じようともせぬとの事である。その長男がまた新しい青雲を望んで、ひそかに国を脱走するといふのは……何と面白い話では無いか。

けれど自分がこの三人と交際したのは纔か二年に過ぎなかつた。山県は家が余り富んで居ない為め、学資が続かないで失望して歸つて了ふし、根本は家から迎ひの者が来て無理往生に連れて行つて了ふし、唯一人杉山ばかり自分と一緒に其志を固く執つて、翌年の四月陸軍幼年学校の試験に応じたが自分は体格で不合格、杉山は亦学科で失敗して、それが

らといふものは自分等の間にもいつか交通が疎くなり、遂には全く手紙の交際になつて了つた。杉山は猶暫く東京に滞つて居た様子であつたが、耳にするその近状はいづれも面白からぬ事ばかりで、やれ吉原通を始めたの、筆屋の娘を何うかしたの、日本授産館の山師に騙されて財産を半分程失くしたのと全く自暴自棄に陥つたやうな話であつた。それから一年程経つて失敗に失敗を重ねて、茫然田舎に歸つて行つた相だが、間もなく徴兵の鬪が当つて高崎の兵營に入つたといふ噂を聞いた。

四

五年は夢の如く過ぎ去つた。

其の五年目の夏のある静かな日の事であつた。自分は小山から小山の間へと縫ふやうに通じて居る路を喘ぎ／＼伝つて行くので、前には僧侶の跣坐したやうな山が藍を溶したやうな空に巍然として聳えて居て、小山を開墾した畑には蕎麦の花がもうそろ／＼その白い美しい光景を呈し始めようとして居た。空気は此上も無く澄んで、四面の山の涼しい風が何処から吹いて来るとも無く、自分の汗になつた肌を折々襲つて行くその心地好き！こ

れは山でなければ得られぬ賜と、自分はそれを真袖まそでに受けて、思ふさま山の清い※氣けいきを吸つた。十年都会の塵にまみれて、些いさゝかの清い空気をだに得ることの出来なかつた自分は、長野の先の牟礼むれの停車場で下りた時、その下を流るゝ鳥居川の清溪と四辺あたりを囲む青山の姿とに、既に一方ひとかたならず心を奪はれて、世にもかゝる自然の風景もあることかと坐そゞろに心を動かしたのであるが、溪橋を渡り、山嶺さんれいをめぐり、進めば進むほど、行けば行くだけ、自然の大景は丁度ちやうど尽きざる絵巻物を広げるが如く、自分の眼前に現はれて来るので、自分益々興を感じて、成程これでは友が誇つたのも無理ではないと心しんから思つた。

小山と小山との間に一道の溪流けいりう、それを渡り終つて、猶其前に聳えて居る小さい嶺みねを登つて行くと、段々四面あたりの眺望てうぼうがひろくなつて、今迄越えて来た山と山との間の路が地図でも見るやうに分明はつきり指点せらるゝと共に、この小嶺せうれいに塞ふさぎがれて見得なかつた前面の風景も、俄にはかにパノラマにでも向つたやうにはつと自分の眼前に広げられた。

上州境の連山が丁度ちやうど屏風びやうぶを立廻したやうに一帶つらなに連り渡つて、それが藍あゐでも無ければ紫でも無い一種の色に彩いろどられて、ふはくとした羊の毛のやうな白い雲が其絶巔ぜつてんからいくらか離れぬあたりに極めて美しく靡なびいて居る工合、何とも言へぬ。そして自分のすぐ前の山の、又その向ふの山を越えて、遙はるかに帯ひを曳ひいたやうな銀しろがねの色のきらめき、あれは

恐らく千曲ちくまの流れで、その又向ふに続々と黒い人家の見えるのは、大方中野の町であらう。と思つて、ふと少し右に眼を移すと、千曲川の沿岸とも覺しきあたりに、絶大なる奇山の姿！

何と言ふ山か知らん……と自分は少時しばらくその好景に見惚みとれて居た。

ふと背負籠しよひかごを負つた中老漢ちゆうおやちが向ふから上つて来たので、

「あの山は？」

と指ゆびさして尋ねた。

「あれががすか、あれははア、飯山いひやまの向ふの高社山かうしやさんと申しやすだア」

あれが高社山！ よく友の口から聞いたと思ふと、其時の事が簇々むらぐと思ひ出されて今更其頃なつが懐かしい。其頃は其仙境を何時いつ尋ねて行かれるであらうか、或は一生涯尋ねて行く事が出来ぬかも知れぬなどと思つて居たが、五年後の今日かうして尋ねて行くとは、如何に縁の深い事であらう。

「塩山村しほやまむらへはまだ余程あるかね」

「塩山へかね」と背負籠しよひかごを傍かたはらの石の上に下して、腰を伸しながら、「塩山へは此処からまだ二里と言ひやすだ。あの向ふの大い山でかの下に小い山こまかが幾箇いくつとなく御座らつせう。その

山 やま 中 なか だアに……」

「塩山に根本といふ家はあるかね」

と自分は更に尋ねた。

「根本……：御座らしやるとも、根本ていのア、塩山では一等の丸持 まるもち 大尽 だいじん でごわすア」と答へて、更に、「で貴郎 あんた ア、根本さア処 とけ の御客様 おきやくさん かね」

「其処 かうすけ に行 むすこ 輔 むすこ といふ子息 むすこ が有るだらう？」

「御座らつしやる」と言つて吸ひ懸けた烟草 たばこ の烟 けむり を不細工な獅子鼻 ししびし からすうと出し、「大尽 だいじん どの子息 むすこ に似合ねえ堅い子息 むすこ でごわすア、何でも東京へ行 い かつた時にア、それでも四五百も遣 い つたといふ噂 うわさ だが、それから堅 かた くなつて、今 いま ぢや村 むら でも評判 へいばん ものでごわす」

「一体 おまへ 汝 おまへ は何処 どこ だね？ 塩山 しんざん かね」

「いんにや、塩山 しんざん ではごへん、その一つ前の村 むら の倉沢 くらさわ でごわす」

「もう根本 こんぽん は女 かみさん 房 ぼう を持 も たらう」

「鼻 か までごわすか、持 も ちましたとも、……えいと……あれは確 たしか か三年前 さんねんまえ で、芋 いも 子 こ 村 むら の大尽 だいじん の娘 むすめ さアだ」

「子供 こども は？」

「まだごわしねえ、もう出来さうな者だつて此間も父様えらく心配のう為で御座らしやつたけ」

「それでは山県といふのも知つてるだらう」

「山県——はア学校の先生様だ、私等が餓兒も先生様の御蔭にはえらくなつてゐるだ。好い優しい人で、はア」

「それでは杉山は何うしてるね」

「えらく、貴郎ア、塩山の人の名前知つて御座らつしやるだ。貴郎ア、若い者等が東京に出た時懇意に為すつて居た先生だかね……」

言懸けてじろくと自分の顔を見て、

「……杉山の子息……あれア、今は徴集されて戦争（日清戦争）に行つてるだ。あの山師にや、村ではもう徴々して居るだ。長野に興業館といふ東京の山師の店見ていなものを押立てて、薬材で染物のう御始めるつて言つて、何も知らねえ村の者を騙くらかして、何でもはア五六千円も集めただ。それを皆な妾を置いたり、芸妓を家に引摺込んだり、遊廓に毎晩のやうに行つたり、二月ばかりの中に滅茶くにして仕舞つたダア。……恐ろしい虚言家でナ、私等も既の事欺騙かされる処でごわした」

「家は今何うしてるね」

「家でごすか、余程あれの爲めに金のう打遣つたでがすが爺様まだ確乎して御座らつしやるし、廿年前までは村一番の大尽だつたで、まだえらく落魄ねえで暮して御座るだ」

と言つたが、ふと思出した様に、

「塩山つていふ村は、昔からえらく変り者を出す所でナア、それが爲めに身代を拵へる者は無えではねいだが、困つた人間も随分出るだア」

「今でも困つた人間が居るかね」

中老漢は岩の上に卸した背負籠を担つて、其儘歩き出さうとして居たが、自分に尋ねられて、

「つい、今もそれで大騒ぎをして居るだア」

と言つた。

そして、その大騒の何を意味して居るかを語らずに、其儘急いで向ふへと下りて行つて了つた。自分は猶少時其処に立つて、六年前の友が何んな生活を為て居るであらうかといふ事、其妻は如何なる人で、其家は如何なる家で、その家庭は何んな具合であるかとい

ふ事などを思ふと、種々なる感想が自分の胸に潮のやうに集つて来て、其山中の村が何だか自分と深い宿縁を有つて居るやうな気が為て、何うも為らぬ。

一時間後には、自分はもう其懐かしい村近く歩いて居た。成程山又山と友の言つたのも理と思はるゝばかりで、溪流はその重り合つた山の根を根気よく曲り曲つて流れて居るが、或ところには風情ある柴の組橋、或るところには竜の住みさうな深い青淵、或は激湍沫を吹いて盛夏猶寒しといふ白玉の溪、或は白簾虹を掛けて全山皆動くがごとき飛瀑の響、自分は幾度足を留めて、幾度激賞の声を挙げたか知れぬ。で、その曲り曲つた溪流に添つて、涼しい水の調に耳を洗ひながら、猶三十分程も進んで行くと、前面が思ひも懸けず俄かに開けて、小山の丘陵のごとく起伏して居る間に、黄稲の実れる田、蕎麦の花の白き畑、鬱蒼と茂れる鎮守の森、とところどころに基石を並べたやうに、散在して居る茅葺の人家。

手帳の画がすぐ思出された。

あゝこの静かな村！この村に向つて、自分の空想勝なる胸は何んなに烈しく波打つたであらうか。六年間、思ひに思つて、さて今のこの一瞥。

殊に、自分は世の塵の深きに泥れ、久しく自然の美しさに焦れた身、それが今思ふさま

その自然の美を占める事が出来る身となつたではないか。この静かな村には世に疲れた自分をやさしく慰めて呉れる友二人まであるではないか。

顧ると、夕日は既に低くなつて、後の山の影は速くその鎮守の森に及んで居る。壁はいよく、深碧ふかみどりの色を加へて、野中の大杉の影はくつきりと線を引いたやうに、その午後そびの晴やかな空に聳そびえて居る。山県の家は何でもその大杉の陰と聞いて居たので、自分は眼そなたを放つてじつと其方を打見やつた。

静かな村！

五

と思つた途端、ふと自分の眼に入つたものがある。大杉の陰に簇々むらむらと十軒ばかりの人家が黒く連つて居て、その向ふの一段高い処に小学校らしい大きな建物があるが、その広場とも覺しきあたりから、二道の白い水が、碧みどりなる大空に向つて、丁度大きな噴水器を仕掛たごとく、盛さかんに真直に迸へいしゆつ出して居る。

そしてその末が美しく夕日の光にかゞやき渡つて見える。

「あれは何だね」

折から子供を背負つた十歳ばかりの洩垂しの頑童が傍に来たので、怪んで自分は尋ねた。

「あれ了、唧筒だい」

と言つたが、見知らぬ自分の姿に其儘走つて行つて了つた。

成程唧筒に相違ない。けれどこの静かな山中の村にあのやうな唧筒！ 火事などは何十年有らうとも思はれぬこの山中に、あのやうな唧筒の練習！ 自分は何だか不思議なやうな気が為て仕方が無かつたが、これは只何の意味も無い練習に止まるのであらうと解釈して、其儘其村へと入つて行つた。先最初に小さい風情ある溪橋、その畔に終日動いて居る水車、婆様の繰車を回しながら片手間に商売をして居る駄菓子屋、養蚕の板籠を山のごとく積み重ねた間口の広い家、娘の唄を歌ひながら一心に機を織て居る小屋など、一つ／＼頭はれるのを段々先へ先へと歩いて行くと、高低定らざる石の多い路の凹処には、水が丸で洪水の退いた跡でもあるかのやうに満ち渡つて、家々の屋根は雨あがりの後のごとく全く湿ひ尽して居る。

否、そればかりではない、それから大凡十間ばかり離れたところには、新しい一箇の赤

塗の大きな唧筒が据ゑられてあつて、それから出て居る一箇のツクの管は後の尾谷の溪流に通じ、二箇の径五寸ばかりの管は大空に向つて烈しい音を立てながら、盛んに迸出して居るのを認めた。

其周囲には村の若者が頬かぶりに尻はしよりといふ体で、その数大凡三十人許り、全く一群に為つて、頻りにそれを練習して居る様子である。唧筒の水を汲み上げるもの、ツクの管を荷ふもの、管の尖を持つて頻りに度合を計つて居るもの、やれ今少し力を入れるの、やれ管が少し横に曲るの、やれ洩るの、やれ冷いのと、それは一方ならぬ大騒で、世話人らしい印半纏を着た五十格好の中老漢が頻りにそれを指図して居るにも拘はず、一同はまだ好く唧筒の遣ひ方に慣れぬと覺しく、管から迸出する水を思ふ所に遣らうとするには、まだ余程困難らしい有様が明かに見える。一同は今水を学校の屋根に濺がうとして居るので、頻りに二箇の管を其方向に向けつゝあるが、一度はそれが屋根の上を越えて、遠く向ふに落ち、一度は見当違ひに一軒先の茅葺屋根を荒し、三度目には学校の下の雨戸へしたゝか打ち付けた。

「やあー!」

と後で喝采した。

見ると、路の傍、家の窓、屋根の上、樹の梢などに老若男女殆ど全村の人を尽したかと思はるゝばかりの人数が、この山中に珍らしい唧筒の練習を見物する為めに驚くばかり集つて居るので、旨く行つたとては、喝采し、拙く行つたとては、喝采し、やれ管が何うしたの、やれ誰さんがずぶ濡れになつたのと頻りに批評を加へるのであつた。

余り面白いので、自分は思はず立留つてそれを見た。この多い若者の中に自分の友が交つて居はせぬかとも思はぬではなかつたが、さりとして別段それを気にも留めずに、只余念なく見惚れて居た。自分の前には川に浸けてある方の管が蛇ののたくつたやうに蠕つて、其中を今しも水が烈しい力で通つて行くと覺しく、針のやうな隙間から、しうくくと音して烈しく余流が逆出して居る。で、一同はやつとの思ひで、其目的の学校の屋根に涼しい一雨を降らせたが、ふと其群の一人——古い手拭を被つて縞の単衣を裾短かに端折つた——が何か用が出来たと見えて、急いで自分の方へ下りて来た……と……思ふと、二人は顔を見合せた。

「おや、君ぢや無いか」

と自分は言つた。

「やア富山……さん！」

と根本行輔は驚いて叫んだ。

丸きり六年逢はぬのだが、その風貌といひ、その態度といひ、更に昔に変わらぬので、これを見ても、山中の平和が、直ぐ自分の脳に浮んだ。

渠は限りなき喜悅の色を其穏かな顔に呈して、頻りに自分の顔を見て居たが、不図傍に立つて居る其家の家童らしい十四五の少年を呼び近づけて、それに、この御客様を丁寧に家に案内せよといふ事を命じ、さて自分に向つては、

「失礼ですが、村の若い者でこんな事を遣り懸けて居ますだで……一足先に家に行つて休んで居て下され。もうすぐ済むだで、跡から直きに参じますだに」

自分は小童に導かれて、其儘根本行輔の家へと行つた。一方稲の穂の豊年らしく垂れてゐる田、一方甜瓜の旨さうに熟して居る畠の間の細い路を爪先上りにだら／＼とのぼつて行くと、丘と丘との重り合つた処の、やゝ低く凹んだ一帯の地に、一棟の茅葺屋根と一つの小さい白壁造の土蔵とがあつて、其後には櫛の十年ほど経つた疎らな林、その周囲には、蕎麦や、胡瓜や唐瓜や、玉蜀黍などを植ゑた畠、猶近づくと、路の傍に田舎には何処にも見懸ける不潔な肥料溜があつて、それから薪を積み重ねた小屋、雑草の井桁の間に満遍なく生えて居る古い井、高く夕日の影に懸つて見える桔※、猶その前に、

鍬や鋤を洗ふ為めに一間四方ばかり水溜が穿たれてあるが、これはこの地方に特有で、この地方ではこれを田池たねけと称とへて、その深さは殆ど人の肩を没するばかり、鯉こひ、鮒ふなの魚類をも其中に養つて、時には四五尺の大きさまで育てる事もあるといふ話。周囲には萱かややら、薄すきやらの雑草が次第もなく生ひ茂つて水際には河骨かうほね、撫子なでしこなどが、やゝ濁つた水にあたらその美しい影をうつして、居るといふ光景であつた。山県の話に、自分が十五六の悪戯たづらざかり 盛には相棒の杉山とよくこの田池たねけの鯉を荒して、一夜に何十尾といふ数を盗んで、殆ど仕末に困つた事があつたとの事を聞いて居つたが、その所いはゆる謂田池がこんな小さな汚穢たない者とは夢にも思つて居らなかつた。否、其友の家——村一番の大尽の家をもこんな低い小さいものとは？

ふと見ると、その田池に臨んで、白い手拭を被つた一人の女が、頻しきりに草刈鎌を磨いで居る。

「神さまア、旦那様だんなさまに吩咐いひつかつて、東京の御客様ア伴れて来たゞア」
と小童は突だしぬけ如に怒鳴つた。

女は驚いて顔を上げた。何処と言つて非難すべきところは無いが、色の黒い、感覺の乏しい、黒々と鉄漿おはぐろを附けた、割合に老ふけた顔で、これが友の妻とすぐ感附いた自分は、

友の姿の小さく若々しいのに比べて、いかにこの妻の丈高く、体格の大きいかといふ事に思ひ及んだ。これは大方東京で余り「老いたる夫と若い妻」との一行を見馴れた故であらう。

自分はその妻の手に由つて、直ちに友の父なる人に紹介された。父なる人は折しも鋸や、鎌や、唐瓜や、糸屑などの無茶苦茶に散ばつて居る縁側に後向に坐つて、頻りに野菜の種を選分けて居るが、自分を見るや、兼ねて子息から噂に聞いて居つた身の、さも馴々しく、

「これはく東京の先生——好う、まあ、この山中に」

といふ調子で挨拶された。

流石は若い頃江戸に出て苦労したといふ程あつて、その人を外さぬ話し振、その莞爾と満面に笑を含んだ顔色など、一見して自分はその尋常ならざる性質を知つた。輪廓の丸い、眼の鋭い、鼻の尖つた顔のつくりで、体格は丸で相撲取でもあるかのやうに、でっぷりと肥つて、体重は二十貫目以上もあらうかと思はれるばかりであつた。これが当年の無頼漢、当年の空想家、当年の冒険家で、一度はこの平和な村の人々に持余されて、菰に包んで千曲川に投込まれようとまで相談された人かと思ふと、自分は悠遠なる人生の

不可思議を胸に覚えずには居られぬので。

此時、奴僕らしい三十前後の顔の汚い男が駆けて遣つて来て、

「大旦那さア、がいに暑いんで、馬が疲れて、寝そべつて、起きねえが、はア何う為べいと叫んだ。

「また寝そべつたか、困るだなア、汝、余り劇く虐使ふでねえか」

「虐使ふどころか、此間も寝反つただから、四俵つけるところを三俵にして来ただアが」
「何処へ寝反つてるだ」

「孫右衛門どんの垣の処の阪で、寝反つたまゝ何うしても起きねえだ。己あ何うかして起すべし思つて、孫右衛門さん許へ頼みに行つただが、少い娘つ子ばかりで、何うする事も為得ねえだ」

「仕方の無え奴等だ」

と罵倒したが、傍に立つて居る子息の妻に向つて、

「ぢや御客様にはえらい失礼だが、私あ馬を起しに行つて来るだあから、お前は御客様を奥に通して、行輔が帰つて来る迄、緩り御休ませ申して置け」

自分に向つては、

「それぢや、先生様失礼しやす！」

自分の挨拶をも聞かず、

「一所に歩べ……おい、作公、何を愚図くしてやがるんだ？」

と怒鳴りながら走つて行つた。

同時に自分は奥の一室へと案内される。奥の一室——成程此処は少しは整頓して居る。

床の間には何んな素人が見ても贗と解り切つた文晁の山水が懸つて居て、長押しには孰れ飯山あたりの零落士族から買つたと思はれる槍が二本、さも不遇を嘆じたやうに黒く燻つて懸つて居る。けれど都とは違つて、造作は確乎として居るし、天井は高く造られてあるから風の流通もおのづから好く、只、馬小屋の蠅さへ此処まで押寄せて来なければ、中々居心の好い静かな室であるのだが……

やがて妻君は茶器を運んで来たが、おづくと自分の前に坐つて、そして古くなつた丸谷焼の急須から、三十目くらゐの茶を汲んで出した。

「田舎は静かで好いですナア」

と自分はそれとなく言ふと、

「いゝえ、静かどころでは……此頃は、はア、えらく物騒で……」

「何うしてゝす」

と自分は怪んで尋ねた。

「此頃は、はア、えらく火事があるんで、夜もゆつくり寝ては居られないで、はア」

「何うしてゝす？」

「何うしてといふ訳も無えだすが……」

と躊躇ふのを、

「放火なのですか」

「はア」

「誰か悪い者でもあるんですか」

「はア、悪い者があつて、どうも困り切りますだア」

暫時沈黙。

「はア」と自分は緩い茶を一杯啜つてから、「それでですナア、今唧筒を稽古して居るの

は？」

「貴郎さまも見て御座らしやつたゞか、火事が、はア、毎晩のやうにあつて、物騒で、仕方無えもので、村で、割前で金のう集めて、漸く東京から昨日唧筒が出来て来ただア」

「東京から唧筒？」

「はア、昨日出来て来たばかりで……村にやもう何十年と火事なんぞは無いで、唧筒なんぞは有りませんでした。今度は、はア仕方が無えのでござす。そして、今夜にも火事が打始らねえ者でも無えといふので、若い者が午から学校へ寄り集つて、唧筒の稽古を為して居るんでござす。……」と少時途絶えて、「でも、……大方水は撒いたやうだ、もう直き帰つて来るでござしやう」

と言つたが、更に氣を更へて、

「まア、御疲れだせうに、緩くり横にでも成つて休まつしやれ。牟礼には三里には遠いから」

と古い黒塗の枕を出して、そして挨拶して次の室へ下つた。

見ると、中々好い眺望である。地位が高いので、村の全景がすっかり手に取るやうに見えて、尾谷川の閃々と夕日にかゞやく激湍や、三ツ峯の牛の臥たやうに低く長く連つて居る翠微や、猶少し遠く上州境の山が深紫の色になつて連り亘つて居る有様や、ことに、高社山の卓れた姿が、此処から見ると、一層魁偉の趣を呈して居るので、その雲煙の変化が少なからず、自分の心を動かしたのであつた。あゝこの平和な村！ あゝこの

美しい自然！と思ふとすると、今言つた妻君の言葉がゆくりなく簇々^{むらぐ}と自分の胸に思ひ出された。この平和な村に唧筒^{ポンプ}！この美しい村に放火！殊に何十年とそんな例^{ためし}が無かつたといふこの村に！これは何か意味が無くてはならぬ。これは必ず不自然な事があつたに相違ないと自分は思つた。空想勝なる自分の胸は今しもこの山中にも猶絶えない人生の巴渦^{うづまき}の烈しきを想像して転^{うた}た一種の感に撲^{うた}れたのであつた。

六

「放火^{つけび}が流行^{はや}るツて言ふが、一体何^どうしたんです？」

かう言つて自分は友に訊^{たづ}ねた。これは一時間程前、友はその唧筒^{ポンプ}の稽古から歸つて来て、いろいろ昔の事や、よくこんな山^{やま}中^{なか}に来て呉れたといふ事や、余り突然なので吃驚^{びっくり}したといふ事や、六年ぶりの何や彼^かやを殆ど^{ほとん}語り尽した後で、自分の前には地酒の不味^{まずい}のながら、二三本の徳利が既に全く倒されてあつて、名物の蕎麦^{そば}が、椀に山盛に盛られてある。妻君は、田舎流儀^{みなか}の馳走振に、日光塗の盆を控へて、隙^{すき}が有つたなら、切込まうと立構へて居るので、既に数回の太刀打^{たちうち}に一方^{ひとかた}ならず参つて居る自分は、太^{いた}くそれを恐れて

居るのであつた。友も稍酔つた様子で、漸く戸外の闇くなつて行くのを見送つて居たが、不意に、かう訊ねられて、われに返つたといふ風で、

「本當に困つて了ふですア、夜も碌々寝られないのですから」

「それで、一体、犯罪者が解らんのかね？」

「それア、もう彼奴と極つて、居るんだが……」

「何故、捕縛しないのだね？」

「それが田舎ですア……」と友は言葉を意味あり気に長く曳いて、「駐在所に巡查ア、一人来て居る事は居るんですが、田舎の巡查なんていふ者は、暢気な者だで、嫌疑が懸つたばかりでは、捕縛する事ア出来ん。現行犯でなければ……とかう言つて済まして居りやすだア。一体、巡查先生の方がびく／＼して居るんで御座すア、だもんだで、彼奴ア、好い氣に為つて、始めからでは、もう十五六軒もツン燃やしましたぜ」

「十五六軒！」

「この小さい村、皆な合せても百戸位しか無いこの小さい村に、十五六軒ですだで、村開闢 以来の珍事として、大騒を遣つて居りますだア」

「それは左様だらう」

少時しばらく経つてから、

「で、一体、その悪漢わるものは何者だね、村の者かね」

「はア、村の者でさア」

「村の者で、それでそんな大胆な事を為するといふのは、其処そこに何か理由がある事だらうが……」

「何アに、はア御話にも何にもなりやしやせん。放蕩者どらもので、性質たちが悪くつて、五六年も前から、もう村の者ア、相手に仕なかつたんでごすから」

「まだ若いのかね」

「いや、もう四十二三……」

「それぢや分別ぶんべつごかり盛だのに……」

と自分は深く考へた。

「御口にア、合ひますめいけど、何にもがアせんだに、せめて、蕎麦など上つてお呉れんし」

と妻君は盆を出した。

自分はもう十分であるといふ事を述べて、そして蕎麦の椀を保護すべく後に遺つた。そ

れでは御酒ごしゆでもと妻君は徳利を取上げたので、それをも辞義してはと、前のを飲干して一杯受けた。

「それにしても……」と自分は口を開いて、

「十何回も放火すを為るのに、一度位実行して居るところを見付けさうな者ですがナア」

「それが、彼奴きやつが実行するのなら、無論見付けない事は無いですが、彼奴の手下あまに娘つ子こが一人居やして、そいつが馬鹿に敏すばしつこ捷こくつて、丸で電光いなづまか何ぞのやうで、とても村

の者の手には乗らねえだ」

「それは奴の本当の娘なんですか」

「否いや、今年の春頃から、噂代りに連れて来たんだといふ話で、何でも、はア、芋沢いもさはあた

りの者だつて言ふ事だす。此奴が仕末におへねえ娘つ子あまこで、稚い頃ちひさから、親も兄弟もなく、

野原で育つた、丸で獣けだものといくらも変らねえと云ふ話で、何でも重右衛門（嫌疑者の名）が

飯綱原いひつなはらで始めて春情いひ、ことを教へたとか言いふんで、それから、村へ来て、噂の代りを勤めて

居るが、これが実に手におへねえだ。重右衛門が自身手を下すのでなく、この獣のやうな娘つ子むすめこに吩咐いひつけて火を放つけさせるのだから、重右衛門と言ふ事が解つて居ても、それを捕縛すばしこくするといふ事は出来ず、さればと言つて、娘つ子は敏捷すばしこくつて、捕へる事は猶々なほ出来ず、

殆ど困つて仕舞つたでがすア」

「年齢としは何歳位？」

「まだ漸やつと十七位のもんだせう」

「それが捕へる事が出来ないとは！ 高むすめが娘こつ子一人」

「知らない人はさう思ふのは無理は無いだす。高あまが娘こつ子一人、それを捕へる事が出来ぬとは、余り馬鹿なくしくつて話にも何にも為らない様だが、それを知つて御覧なされ、それは実に驚いたもので、今其処に居たかと思ふと、もう一里も前に行つて居るといふ有様若い者などがよく村の中央まんなかで邂逅であつして、石などを投はりつて遣やる事が幾度いくたびもある相ですが、中々一人や二人では敵かなはない。反対あへこへに眉間みけんに石を叩たき付けられて、傷を負つた者は幾人いくたりもある。それで此方こつちが五人六人、十人と数が多くなると、屋根でも、樹でも、するくくと攀よぢ上のぼつて、丸で猫でもあるかのやうに、森と言はず、田と言はず、川と言はず、直ちに遁にげて身を隠して了ふ。それは実に驚くべき者ですア」

此時、ふと、

「やあー！」

と言つて庭から入つて来た者があつた。見ると、それは懐なつかしい山県行三郎君で、自分が

来たといふ事を今少し前に知らせて遣つたものだから、万事を差措さしおいて急いで遣つて来たのであつた。夏の夕は既に暮れて、夕暮の海の様ように晴れ渡つた大空には、星が降るやうに閃きらめいて居るが、十六日の月は稍遅やく、今しも高社山かうしやせんの真黒な姿の間から、其の最初の光を放たうとして、その先鋒せんぽうとも称すべき一帯の余光を既に夜露の深い野に山みなぎに漲らして居た。四辺あたりはしんとして、しつとりとして、折々何とも形容の出来ない涼しい好い風が、がさ／＼と前の玉蜀黍たうもろこしの大きな葉を動かすばかり、いつも聞えるといふ虫の声さへ今宵こよひは何うしてか音を絶つた。でも、黙つて、静かに耳そばだを敬そてると、遠くでさら／＼と流れて居る尾谷川の溪流の響なが、何だか他界から来るある微妙な音楽でも聞くかのやうに、極めて微かに聞えて居る。

疎まばらな鎮守の森を透とほして、閃々きら／＼する燈火の影が二つ三つ見え出した頃には、月が己すでにその美しい姿を高社山の黒い偉大なる姿の上に頭あははして居て、その流るゝやうな涼しい光は先第一まづに三峯みつみねの絶巔いたゞきとも覚おぼしきあたりの樹立こたちの上を掠かすめて、それから山の陰かたよに偏つて流るゝ尾谷の溪流には及ばずに直ちに丘の麓ふもとの村を照し、それから鎮守の森の一端を明かに染めて、漸やうやく自分等の前の蕎麦の畑に及んで居る。洋燈ランプをさへ点つけなければ、其光は我等の清宴の座まに充みちて居るに相違ないのである。

山県が来たので、一座の話に花が咲いて、東京の話、学校の話、英語の話、詩の話、文学の話、それからそれへと更にその興は尽きようともせぬ。果ては、自分は興に堪へかねて、常々暗誦して居る長恨歌を極めて声低く吟じ始めた。

「この良夜を如何んですナア」

と山県はしみ／＼感じたやうに言つた。

此時鎮守の森の陰あたりから、夜を戒める柝木の音がかち／＼と聞えて、それが段々向ふへ／＼と遠かつて行く。

「今夜の柝木番は誰だえ、君ぢや無かつたか」

と根本は山県に訊ねた。

「私だつたけれど、……富山君が来たと謂ふから、松本君に頼んで、代つて貰つたんです。その代り今夜十時から二時間ばかり忍びの方を勤めさせられるのだ」

「僕も二時から起される訳になつて居るんだが」と言つて、急に言葉を変へて、「それから、先程聞くと、昼間あの娘つ子が唧筒の稽古を見て居たと言ふが、それア、本当かね」「本当とも……総左衛門どんの家の角の処で、莞爾笑ひながら見てけつかるだ。余り小癩に触るつて言ふんで、何でも五六人許で、撲りに懸つた風なもんだが、巧にその下を

潜つて狐のやうに、ひよんく遁げて行つて了つたさうだ。……それから重右衛門も来て見物して居たぢやないか」

「重右衛門も？」

「あの野郎、何処まで太いんだか、見物しながら、駐在所の山田に喧嘩見たやうな事を吹懸けて居たつけ。何んだ、この藤田重右衛門が駐在所の巡査なんか恐れやしねえ、何んだ村の奴等ア、唧筒なんて、騒ぎやがつて、それよりア、この重右衛門に、お酒でも上げた方が余程効能があるんだ。ツて、大きな声で呶して居やがつたつけ。何でも酒を余程飲んで居た風だつた」

「誰が酒を飲ましたのか知らん」

「誰がつて……野郎、又威嚇文句で、又兵衛（酒屋の主人）の許へ行つて、酒の五合も喰つて来たんだ」

「困り者だナア」

と根本は心から独語いた。

「それから、言ふのを忘れたが、……先程此処に来る時、あの森の傍で、がさく音が為るから、何かと思つて、よく見ると、あの娘つ子め、何かまごく搜して居る。此奴怪し

いと思つたから、何を為てるんだ！ と態と大きい声を懸けて遣つた。すると、猫のやうな眼で、ぎよろツと僕を見て、そしてがさ／＼と奥の方に身を隠して了つた。丸で獣に些とも違はない……それから、私は、会議所に行つて、これ／＼だから注意して呉れと言つて来た」

自分は二人の会話を聞きながら、山中の平和といふ事と、人生の巴渦といふ事を取留もなく考へて居た。月は段々高くなつて、水の如き光は既に夜の空に名残なく充ち渡つて、地上に置き余つた露は煌々とも美しく閃めいて居る。さらぬだに寂寞たる山中の村はいよ／＼しんとして了つて、虫の音と、風の声と、水の流るゝ調べの外には更に何の物音も為ぬ。

一時間程経つた。

すると、不意に、この音も無くしんとした天地を破つて、銅鑼を叩いたなら、かういふ厭な音が為るであらうと思はれる間の抜けたしかも急な鐘の乱打の響！

二人は愕然とした。

「又遣付けた！」

と忌々しきうに叫んで、根本の父は一散に駆けて行つた。

「糸くめさんの家とこだア、糸くめさんの家とこだア」

と、誰か向ふの畔あぜを走りながら、叫ぶ者がある。山県はちらと見たが、「あ、僕の家らしい！」と叫んで、そして跣足はだしの儘ま、慌あわてて飛出した。

根本も続いて飛出した。

見ると、月の光に黒く出て居る鎮守の森の陰から、やゝ白けた一通けむりの烟けむりが蜃気楼しんきろうのやうに勢よく立のぼつて、其中から紅あかい火が長い舌を吐いて、家の燃える音がぱち／＼と凄すさまじく聞える。山際の寺の鐘も続いて烈しく鳴り始めた。

一散に自分も駆け出した。

七

田の畔くろを越えて、丘の上を抜けて、谷川の流を横よこぎつて、前から、後から、右から、左から、其方向に向つて走り行く人の群、それが丁度大海に集るごとく、鎮守の森の陰の路へと進んで来るので、平生いっしょならば人も滅多に来ない鎮守の森の裏山は全く人の影を以て填うめられて了つた。自分は駆出す事は駆出したが、今日来たばかりで道の案内も好く知らぬ身

の、余り飛出し過ぎて思ひも懸けぬ災難に逢つては為らぬと思つたから、其儘少し離れた、小高いところに身を寄せて、無念ながら、手を束ねて、友の家の焼けるのをじつと見て居た。

眼前に広げられた一場の光景！ 今燃えて居るのは丁度鎮守の森の東表に向つた、大きな家で、火は既にその屋に及んで居るけれど、まだすっかり燃え出したといふ程ではなく、半分燃え懸けた窓からは、燻つた黒い色の烟がもくもくと凄じく迸り出でて、それがすっかり火に為つたならば、下の二三軒の家屋は勿論、前の白壁の土蔵も危くはありはせぬかと思はれるばかりであつた。けれど消防組はまだ一向見えぬ様子で、昼間盛んに稽古して居たその新調の唧筒も、まだ其現場に駆け付けては居らなかつた。暫時すると、燻つて居た火は恐ろしく凄じい勢ではつと屋根の上に燃え上る……と……四辺が急に真昼のやうに明るなつて、其処等に立つて居る人の影、辛うじて運び出した二三の家具、其他いろ／＼の悲惨な光景が、極めて明かに頭はれて見える。火は既に全屋に及んで、その火の子の高く騰るさまの凄じさと言つたら、無い。幸ひに風が無いので、火勢は左程四方には蔓延せぬけれど、下の家の危さは、見て居ても、殆ど冷汗が出るばかりである。

「唧筒！」

と叫ぶ声。

「おい、唧筒は何を為して居るだアーい」

と長く曳いて叫ぶ声。

けれど、本当に何うしたのか、唧筒はまだ遣つて来るやうな様子も見えぬ。屋根の焼落つる度に、美しく火花を散した火の子が高く上つて、やゝ風を得た火勢は、今度は今迄と違つて土蔵の方へと片靡かたなびきがして来た。土蔵の上には五六人ばかり人が上つて頻りに拒ふせいで居た様子だったが、これに面喰めんくらつてか、一人く下りて、今は一つの黒い影を止めなくなつて了つた。

「熱つくて堪らねえ」

「まご／＼して居ると、焼死んで了ふア」

「何うしやがつたんだ。一体、唧筒ポンプは？ 気が利かねえ奴等でねえか」

と土蔵から下りて来た人の会話らしい声がすぐ自分の脚あしもと下に聞える。

と、思ふと、向ふの低い窪地くぼちに簇々むら／＼と十五六人許ばかりの人数が頭あちはれて、其処に辛うじて運んで来たらしいのは昼間見たその新調の唧筒である。

やがて火光に向つて一道の水が烈しく逆へいしゆつ出したのを自分は認めた。

「唧筒確ポンプしつかり頼むぞい！」

「確しつかり遣れ」

「唧筒ポンプ！」

と彼方あつち此方こつちから声が懸る。

で、その唧筒ポンプの水の方向は或は右に、或は左に、多くは正せい鵠こくを得なかつたにも拘からず、兔とに角かく、多量の水がその方面に向つて灑そがれたのと、幸ひ風があまり無かつたのとで、下なる低い家屋にも、前なる高い土蔵にもその火を移す事なしに、首尾よく鎮火したのである。

それが丁度十時二十分。

疲れたから、歸つて、寝ようかとも思つたが、火事の後の空はいよ／＼澄んで、山中の月の光の美しさは、此の世のものとは思はれぬばかりであるから、少し溪流ほとりの畔ほとりでも歩いて見ようと、其そのま儘ま焼跡をくると廻つて、柴の垣の続いて居る細い道を静かに村の方へと出た。

村へ出て見ると、一軒として大騒を遣つて居らぬ家は無く、鎮火と聞いて孰いづれも胸を安めたやうなものの、かう毎晩の様に火事があつては、とても安閑として生活して居られぬと

いふそはくくした不安の情が村一体に満ち渡つて、家々の角には、婦をんなやら、老人としよりやらが、寄つて、集たかつて、いろく喧かしましく語り合つて居る。

「本当にかう毎晩のやうに火事があつては、緩ゆるくり寝ても居られねえだ。本当に早く何どうか為して貰はねえでは……」

「駐在所ぢや、一いつてい体何を為て居るんだか、はア、困つた事だ」

前の老人らしい声で、

「駐在所で、仕末が出来でねえだら、長野へつゝ走つて、何うかして貰えふが好えいし、長野でも何うも出来ねえけりや、仕方が無えから、村の顔役が集たかつて、千曲川へでも投はふりこ込んで了えふが好えいだ」

「本ほん当に左様さうでも為して貰はねいぢや……」

猶なほ少し行くと、

「まごくしてると、己おらが家とこもつん燃されて了えふかも知んねえだ。本当にまア、何うしたら好えい事だか」

「困つた事だ」

とさも困つたといふやうな調子。

聞流して又少し歩いた。

「重右衛門がこんな騒動さわぎを打始めようとは夢にも思ひ懸けなかつた。あれの幼い頃はお互たげへにまだ記憶おぼえて居るだが、そんなに悪い餓鬼がきでも無かつたが……」

かう言つたのは年の頃大凡およそ六十五六の皺しわくちやの老婆であつた。それに向つて立つて居るのも、これも同じく其年輩らしい老婆の姿で、今しも月の光にさも感に堪へぬといふ顔かほ色ほつきを為したが、前の老婆の言葉を受けて、「本当でござよ。重右衛門は、妾わしの遠い親類筋だで、それでかう言ふのではごんせぬが、何アに、あれでも旨うまくさへ育てれや、こんな悪党なにや為なりや仕ないんだす。一体祖父様ぢうさまが悪かつただす。余あんまり可愛がり過ぎたもんだで……」

「だから、子供がきを育てるのも、容易ばかには出来ねえだ」

と他の老婆は言葉を合せた。

自分は其前をも行過ぎた。

すると、路の角に居酒屋らしいものがあつて、其処には洋燈らんぷが明るく点ついて居るが、中うちには七八人の村の若者が酒を飲んで、頻しきりに大きい声を立て居る。

立留つて聞くと、

「重右衛門は火事の中何処に行つて居たツて？」

「奴か、奴ア、直き山県さんの下の家に行つて、火事見舞に來たとか、何とか言つて、酒の馳走になつてけつかつた。あの位図太い奴ア無いだ」

「さういふ時、思ふさま、酒喰はして、ぐつと遣つて仕舞へば好いんだ」

「本当にそれが一番早道だア、と我ア、いつでも言ふんだけど、まさか、それも出来ねえと見えて、それを遣つて呉れる人が無えだ」

「忌々しい奴だなア」

と其中の一人が叫んだ。

自分は又歩き出した。路が其処から川の方に曲つて居るので、それについて左に曲り、猶半町ほど辿つて行くと、もう其処は尾谷川の崖で、石に激する水声が、今迄種々な悪声を聞いた自分の耳に、殆ど天上の音楽の如く聞える。月はもう高くなつたので、溪流の半面はその美しい光に明かに輝いて居るが、向ふに偏つた半面には、また容易に其光が到着しさうにも見えぬ。自分は崖に凭つて、そして今夜の出来事を考へた。友の言葉やら、村の評判やらから綜合して見ると、この事件の中心に為つて居る重右衛門といふ男は確

かに自暴自棄に陥つて居るに相違ないと自分は思った。けれど何うして渠はその自暴自棄の暗い境に陥つたのであらうか。先程の老婆の言ふ所によれば、祖父様が悪いのだ、あまり可愛がり過ぎたから、それで彼様な風に為つたのだと言ふけれど、単に愛情の過度といふのみで、それで人間が、己の故郷の家屋を焼くといふ程の烈しい暗黒の境に陥るであらうか。殊に此村には一種の冒険の思想が満ち渡つて居て、もし単に故郷に容れられぬといふばかりならば、根本の父のやうに、又は塩町の湯屋のやうに、憤を発して他郷に出て、それで名誉を恢復した例は幾許もある。であるのに、それを敢て為しようとも為さず、かうして故郷の人に反抗して居るといふのは、其処に何か理由が無くてはならぬ。その理由は先天的性質か、それとも又境遇から起つた事か。

種々に空想を逞うしたが、未だ其人をさへ見た事の無い身の、完全にそれを断定するところが何うして出来よう。遂に思切つて、そして帰宅すべく家路に就いた。路は昼間小僮に案内して貰つて知つて居るから別段甚しく迷ひもせず、やがて緑樹の鬱蒼と生ひ茂つた、月の光の満足にさし透らぬ、少しく小暗い阪道へとかゝつて来た。村の方ではまだ騒いで居ると見えて、折々人声は聞えるけれど、此の四辺はひつそりと沈まり返つて、木の葉の戦ぐ音すら聞えぬ。自分は月の光の地上に織り出した樹の影を踏みながら、阪の中

段に構へられてある一軒の農家の方へと只無意味に近づいて行つた。

すると、その家の垣根の前に小さな人の影があつて、低頭になつて頻りに何か為て居るではないか。勿論家の蔭であるから、それと分明とは解らぬが、その影によつて判断すると、それは確かに大人で無いといふ事がよく解る。自分は立留つた。そして樹の蔭に身を潜めて、暫しその為様を見て居た。

ぱツとマツチを擦る音！

同時に

「誰だ！」

と叫んで自分は走り寄つた。けれどその影の敏捷なる、とても人間業とは思はれぬばかりに、走寄る自分の袖の下をすり抜けて、電光の如く傍の森の中に身を没して了つた。跡には石油を灑いだ材料に火が移つて盛に燃え出した。

「火事だ、火事だア」

と自分は声を限りに叫んだ。

藤田重右衛門と言ふのは、昔は村でも中々の家柄で祖父の代までは田の十町も所有して、小作人の七八人も遣つた事のある身分だといふことである。家は丁度尾谷川に臨んだ一帯の平地にあつて、檜の疎らな並樹がぐるりと其の周囲を囲んで居る奥に、一棟の母屋、土蔵、物置と、普請も尋常よりは堅く出来て居て、村に何か事のある時には、その祖父といふ人は必ず総代か世話人に選ばれるといふ程の名望家であつた。現に根本三之助の乱暴を働いた頃にも、その村の相談役で、千曲川に投込んで了へたと決議した人の一人であつたといふ。性質の穏かな、言葉数の少ない、慈愛心の深い人で、殊に学問——と謂ふ程でも無いが、御家流の字が村にも匹敵するものが無い程上手で、他村への交渉、飯山藩の武士への文通などは皆この人に頼んで書いて貰ふのが殆ど例になつて居たといふ事である。この人は千曲川の対岸の大俣といふ処から、妻を娶つたが、この妻といふ人も至極好人物で、貧乏者にはよく米を遣つたり、金銭を施したりして、年が老つてからは、寺参りをのみ課業として、全く後生を願ふといふ念より外に他は無かつた。であるのに、僅か一代を隔てて、何うしてこんな不幸がその藤田一家を襲つたのであらうか。何うしてその祖父祖母の孫に今の重右衛門のやうな、乱暴無慚の人間が出たのであらうか。

その優しい正しい祖父祖母の間に、仮令女でも好いから、まことの血統を帯びた子といふ者が有つたなら、決してこんな事は無かつたらうとは、村でも心ある者の常に口に言ふ所であるが、不幸にもその祖父祖母の間には一人の子供も無かつたので、藤田の系統を継がしむるために、二人は他の家から養子を為なければならなかつた。今の重右衛門の父と言ふのは、芋沢のさる大尽の次男で、母は村の杉坂正五郎といふものの三女である。何方も左程悪い人間と言ふではないが、否、現に今も子息の事を苦にして、村の者に顔を合せると、又、祖父祖母のやうな卓れて美しい性質は夫婦とも露ばかりも持つて居らなかつたので、母方の伯父といふ人は人殺をして斬罪に処せられたといふ悪い歴史を持つて居るのであつた。で、この夫婦養子の間に間もなく出来たのが、今の重右衛門。子の無い処の孫であるから、祖父祖母の寵愛は一方ではなく、一にも孫、二にも孫と疊にも置かぬほどにちやほやして、その寵愛する様は、他所目にも可笑しい程であつたといふ。処が、この最愛の孫に一つ悲むべきことがある。それは生れながらにして、腸の一部が臈丸に下りて居る事で、何うかしてこの大臈丸を治して遣る方法は無いかと、長野まで態々出懸けて、いろ／＼医者にも掛けて見たけれど、まだ其頃は医術も開けて居らぬ時代

の事とて、一時は腸に収まつて居ても、又何かの拍子で忽たちまち地元ちまに復して了ふので、いくら可愛想に思つても、何どう為する事も出来なかつた。

これが又一層不便ふびんを増すの料となつて、孫や孫やと、その祖父祖母の寵愛ますは益太はなはだ甚しく、四歳よっさい五歳むっさい、六歳むっさいは、夢のやうに掌たなごころの中に過ぎて、段々その性質があらはれて来た。けれど、子供の時分には、只非常に意地の強いといふばかりで、別段これと言つて他の童わらわに異つたところも無かつたといふ事だが、それでも今の老人の中には、重右衛門の子供にも似ぬ、一種茫ぼんやり然なりしたやうな、しつかりしたやうな、要領を得ない処ところがあるのを記憶して居て、どうもあの子は昔から變つて居ると思つたと言ふ者もある。が、概して他の童にさしたる相違が無かつたといふのが、一般の評であつた。山県の総領の兄などはその幼い頃の遊び夥伴なかまで、よく一所に蜻蛉とんぼを交まませに行つたり、草を摘みに行つたり、山葡萄やまぶどうを採とりに行つたり為た事があるといふが、今で、一番記憶に残つて居るのは、鎮守の境内で、鬼おに事を為る時、重右衛門は鞆丸が大いものだから、いつも十分に駆ける事が出来ず、始し終し中鬼よつちゆうにばかり為なつて居たといふ事と、山菜莢やまぐみを採りに三峯に行つた時、その大鞆丸を蜂に食はれて、家に帰るまで泣き続けて居たといふ事と、今一つ、よく大鞆丸を材料たねにして、いろ／＼渾名あきなを付けたたり、悪口を言つたり為るものだから、終しまひにはそれを言ひ始める

と、厭いやな顔をして、折せつ角かく楽らくしげに遊んで居たのも直ぐ止めて歸つて了ふやうになつたといふ事位のものであるさうな。けれど其先天的不具ふしあわせがかれの一生の上に非常に悲劇の材料と為つたのは事実で、人間と生れて、これほど不幸ふしあわせなものには有るまい。それから愛情の過度、これも確かにかれの今日の境遇に陥つた一つの大きな原因で、大きくなる迄、孫や、孫やとやさしい祖父にちやほやされて、一時村の遊び夥伴ななかまの中に、重右衛門と名を呼ぶ者はなく、孫や、孫やで通つたなども、かれの悲劇を思ふ人の有力なる材料になるに相違ない。

月日は流るゝ如く過ぎて、早くも渠かれは十七の若者となつた。其年の春、祖母は老病で死んで了つたが、此年ほど藤田家に取つて運の悪い年は無かつたので、其初夏には、父親が今年こそはと見当を付けて、連年の養やう蚕さんの失敗を恢くわい復ふくしようとして、非常に手を拈ひろげて養つた蚕が、氣候の具合で、すっかり外はづれて、一時に田地の半分ほども人手に渡して了ふといふ始末。かてて加へて、妻の持病の子宮が再発して、枕も上らず臥ふせて居ると、父親は又父親で、失敗の自棄やけを医いさんやのため、長野の遊廓あそびにありもせぬ金を工面して、五日も六日も流みつ連づして歸らぬので、年を老とつた、人の好い七十近い祖父が、独ひとりでそれを心配して、孫や孫やと頻しきりに重右衛門ばかりを力にして、何うか貴様は、親父おやぢのやうに意氣地

なしには為つて呉れるな、祖父ぢいさんの代の田地でんちを何うか元のやうに恢復くわいふくして呉れと、殆ど口癖のやうに言つて居た。

御存じでは御座るまいが、村には若者の遊び場所と言ふやうなものがあつて、(自分は根本行輔の口からこの物語を聞いて居るので)昼間の職業しごとを終つて夕飯を済すと、いつも其処かたはに行つて、娘の子の話やら、喧嘩けんかの話やら、賭博ばくちの話やら、いろいろくだらぬ話を為して、傍かたはら物を食つたり、酒を飲んだりする処がある。今では学校が出来て、教育の大切な事が誰の頭脳あたまにも入つて来たから、さういふ下らぬ遊あそびを為るものも少く為つたけれど、まだ私等の頃までは、随分それが盛んで、やれ平右衛門の二番娘は容色きりやうが好いの、やれ総助の処の末の娘が段々色気が付いて来たのと下らぬ噂うわさを為ばかりならまだ好いが、若者と若者との間にその娘に就いての鞆さやあて当あてが始まる、口論くわんろんが始まる、喧嘩けんかが始まる、皿はしが飛ぶ、徳利とくが破これるといふ大活劇を演ずることも度々で、それは随分弊へいが多かつた。殊ととに其遊び場所の最も悪い弊と言ふのは、その若者の群の中にも自おのづから勢力の有るものと、無いものとの区別があつて、其勢力のある者が、まだ十六七の若い青年を面白半分おもしろいに悪いところに誘つて行く、これが第一の弊だと思ふ。

私なども経験があるが、散々村の遊び場所で騒ぎ散して、さてそれから其処かたはに集つて居

る若者の総ての懷中を改めて、これなれば沢山となると、もう大分夜が更け渡つて居るにも拘らず、其処から三里もある湯田中の遊廓へと押懸けて行く。其一群の中には、屹度今夜が始めて……といふ初陣の者が一人は居るので、それを挑てたり、それを戯つたり、散々翻弄しながら歩いて行くのが何よりも楽みに其頃は思つて居た。そして又、村の若者の親なども、これはもう公然止むを得ざる事と黙許して居て、「家の忪もはア、色気が附いて来たで、近い中に湯田中に遣らざるめい、お前方附いて居て、間違の無いやうに遊ばして呉らつしやれ」とその兄分の若い衆に頼むものさへある。兎に角、村の若い者で、湯田中に遊びに行かぬ者は一人も無く、又初めての翌朝、兄分の者に昨夜の一伍一什を無理に話させられて、顔を赤く為らないものは一人も無い。

重右衛門を始めて湯田中に連れて行つたのは、勝五郎といふ其頃有名な兄分で、今では失敗して行衛知れずになつて居るが、それがよく重右衛門の初陣の夜の事を得意になつて人に話した。

「重右め、不具だもんだで、姫つ子が何うしても承知しねえ、二夜、三夜、五夜ほど続けに行つて、姫つ子を幾人も変へて見たが、何奴も、此奴も厭だアつてぬかして言ふ事を聞かねえだ。朝になつて、あの田中の堤の上を茫然歸つて来ると、重右め、いつも浮かぬ

顔をして待つて居る。昨夜は何うだつたつて……聞くと、頭ア振つて駄目だアと言ふ。それが余り幾夜も続くので、私も、はア、終には氣の毒になつて、重右だツて、人間だア。不具に生れたのは、自分が悪いのぢやねえ。それなのに、その不具の爲めに、女を知る事が出来ねえとあつては、これア氣の毒だア。一つ肌を抜いで世話をして遣らうと思つて、それから私の知つて居る女郎屋の噂様かゝさまに行つてこれくゞだつて話して遣つただ。すると、流石は商売人だで、訳なく承知して呉れて、重右め、其処に行つて泊る事に爲つただ。明日の朝、何んな顔をして居るかと思つたら、奴め、莞爾にこくと笑つて居やがる。背中を一つ喰はせて遣ると、いひくゞくと笑やがつたが、其笑ひ様つて言つたら、そりや形容かたちにも話にも出来ねえだ。本当に、私あ、随分人を湯田中に連れて行つたが、重右の奴ぐらゐ、手数てかずの懸つたのは無え」

と高く笑つて、

「それにしても、考へると、可笑をかくつてなんねえだよ。あの大きいてか鞆丸を拘へてよ、それで姫ツ子を自由に為しようつて言んだから、こいつは中々骨が折れるあ！」

と言ふのが例だ。

で、其からといふものは、重右衛門は好く湯田中に出懸けて行つたが、金を費つかふ割に余

りちやほやされないので、つねに愾々として楽しまなかつたといふ事である。

其中には段々家は失敗に失敗を重ねて、祖父が一人真面目に心配して居るけれど、さてそれを何うする事も出来ず田地は益々人手に渡つて、祖父の死んだ時（それは丁度重右衛門が二十二の時であつた）にはもう田畠でんぱた合せて一町歩位しか無かつたとの話だ。ことに、その祖父の死ぬ時に一つの悲しい話がある。それは、其頃重右衛門は湯田中に深く陥つて居る女があつたとかで、家の衰へて行くのにも頓着せず、米を売つた代価とか、蚕かひこを売つた金とかありさへすれば、五両なり十両なりそれを残らず引攪ひつさらつて飛出して、四日、五日、その金の有らん限り、流連みつぎして更に家に帰らうとも為なかつた。父親と母親とは重右衛門とは始めから仲が悪いので、商売を為るとか言つて、其頃長野へ出て居つたから、家には只死に瀕した祖父一人。その祖父は曾かつ孫を此上なく寵愛ちようあいして、凡およそ祖父の孫に対する愛は、遺憾ひかんなく尽して居つたにも拘からず、その死の床には侍はべつて居るものも一人も無いとは！

二日程前から病に罹かつて、老人はその腰の曲つた姿を家の外に頭あはさなかつたが、其三日目の晩に、あまり家の中がしんとして居ると言ふので、隣の者が行つて見ると、老人としより行火あんくわに凭より懸つたまゝ、丸くなつて打伏して居る。

「爺様！ 何うだね」

と声を懸けても、返事が無い。

「爺様！」

と再び呼んでも、猶返事を為ようとも為ない。これは不思議だと怪んで、急いで傍に行つて見ると、体がぐたりとして水涕を出したまゝ、早既に締が切れて居る。驚いて、これを村の世話役に報告する、湯田中の重右衛門に使を出す、と、重右衛門は遊廓の二階で、大臈丸を抱へて大騒を遣つて居る最中だつたさうで、祖父が死んだといふ悲むべき報知を聞いても、更に涙一つ滴さうでもなく、「死んで了つたものは仕方が無え、明日歸つて、緩り葬礼を出して遣るから、もう歸つて呉れても好い」との無情な言草には、使者も殆ど呆れ返つたとの事だ。

兎に角重右衛門は此頃からそろ／＼評判が悪くなつたので、その祖父の孫に対する愛を知つて居る人は、他村の者までも、重右衛門の最後の必ず好くないといふ事を私語き合つたのである。

祖父が死んだので、父親母親は一先村へ歸つて、少時其家に住んで居た。が、この親子の間柄といふものは、祖父が余り過度に愛した故でもあらうが、それは驚くばかり冷

かで、何かと言つては、直き親子で衝突して、撲り合ひを始める。仲裁に入ると、その仲裁に入った者まで撲り飛ばして、傷を負はせるといふ有様なので、後には誰も相手に為る者が無くなつて了つた。で、この親と子の間に少なからざる活闘が演じられたが、重右衛門は体格が大きく、馬鹿力があつて、其上意地が非常に強く、酒を飲むと、殆ど親子の見さかひも無くなつて了ふものだから、流石の親達も終には呆れ返つてこんな子息の傍には居られぬ、と一年許して、又長野へ出て行つた。

これからが重右衛門の罪悪史である。祖父は歿くなる、親は追出す、もう誰一人その我儘を抑めるものが無くなつたので、初めの中は自分の家の財産を抵当に、彼方此方から金を工面して、猶その放蕩を続けて居た。けれど重右衛門とて、丸きり意識を失つた馬鹿者でも無いから、満更その自分の一生に就いて思慮を費やさぬ事も無いので、時にはいろいろその将来の事を苦にして、自分の家の没落をも何うかして恢復したいと思つた事もあつたらしい。其証拠には、それから、大凡一年ばかり経つと、丸で人間が變つたかと思はれるやうに、もうふつゝりと女郎買をやめて、小作人まかせに荒れて居た田地を耕し、人のために馬を曳いて賃金を取り、養蚕の手伝をして日当を稼ぐなど、それは村の人が一時眼を聳だてる程の勤勉なる労働者と為つた

其頃である。稍その信用が恢復しようとした頃である。村に世話好の男があつて、重右衛門も此頃では余程身持も修まつて来たやうだし、あゝ勤勉に労働する処を見ると、将来にも左程希望が無いとも云へぬ。一つ相応な嫁を周旋して、一層身が堅まるやうに為て遣らうではないかといふ者があつたが、それに賛成する者も随分あつて、彼れかこれかといよく相応の嫁を探して遣る事と為つた。

其候補者には誰が為つたらう。

その頃、村の尽頭に老婆と一緒に駄菓子の見世を出して、子供等を相手に、亀の子焼などを商つて、辛うじて其日の生活を立てて行く女があつた。生れは何でも越後の者だといふ事だが、其処に住んだのは、七八年前の事で、始めはその父親らしい腰の曲つた顔の燻つた汚らしい爺様も居つた相だが、それは間もなく死んで、今では母の老婆と二人暮し。村の若い者などが時々遊びに行く事があつても、不器量で、無愛想で、おまけに口が少し訥ると来て居るから、誰も物好に手を出すものもなく、二十五歳の今日まで、男といふものは猫より外に抱いた事も無かつた。けれど其性質は悪くはない相で、子供などには中々優しくする様子であるから、何うだ、重右衛門、姿色よりも心と言ふ譬もある、あれを貰ふ氣は無いかと勧めた。

重右衛門も流石さすがに二の足を踏んだに相違ないが、余りに人から執念しふねく勧めらるゝので、それでは何うか好いやうにして下され、私等は、ハア、どうせ不具者かたはものでござすと云つて承知して、それより一月ならざるに、重右衛門の寂しい家宅いへにはをりゝ女の笑ふ声が聞える様になつた。

村の人はこれで重右衛門の身が堅まつたと思つて喜んだのである。けれどそれは少くとも重右衛門のやうな性格と重右衛門のやうな先天的不備などころがある人間には間違つた皮相な觀察であつた。一体重右衛門といふ男は負け嫌ひの、横着の、凶々しいところがあつて、そして其上うへに烈しいゝ熱情を有つて居る。で、この熱情が旨く用ひられると、中々大した事業をも為るし、人の眼を驚かす程の偉功をも建てる事が出来るのだけれど、惜しい事には、この男にはこれを行ふ力が欠けて居る。先天的に欠けて居る。この男には「自分は不具者かたはもの、自分は普通の人間と肩を並べることが出来ぬ不具もの」といふ考が、小児こどもの中からその頭脳こゝろに浸み込んで居て、何かすぐれた事でも為ようと思ふと、直ぐその悲しむべき考が脳を衝いて上つて来る。そしてこの不具者といふ消極的思想が言ふべからざる不快の念をその熱情の唯中に、丁度氷でもあるかのやうに、極めて烈しく打込んで行く。この不快の念、これが起るほど、かれには辛いつらことはなく、又これが起るほど、かれ

には忌々しい事はない。何故自分は不具に生れたか、何故自分は他の人と同じ天分を受ける事が出来なかつたか。

親が憎い、己を不具に生み付けた親が憎い。となると、自分の全身には殆ど火焰を帯びた不動尊も畜ならざる、憎悪、怨恨、嫉妬などの徹骨の苦々しい情が、寸時もじつとして居られぬほどに簇つて来て、口惜しくつてく、忌々しくつてく、出来るものならば、この天地を引裂いて、この世の中を闇にして、それで、自分も真逆様にその深い穴の中に落ちて行つたなら、何んなに心地が快いだらうといふやうな浅ましい心が起る。

かういふ時には、譬へ一銭の銅貨を持つて居らないでも、酒を飲まなければ、何うしても腹の中の虫が承知しない。仕方が無いから、居酒屋に飛んで行つて一杯飲む、二杯飲む。あとは一升、二升。

重右衛門の為めには、女房が出来たのは余り好い事では無かつたが、もし二人の間に早く子供が生れたなら、或は重右衛門のこの腹の虫を全く医し得たかも知れぬ。けれど不幸にも一年の間に子をつくる事が出来なかつた二人の仲は、次第に殺伐に為り、乱暴に為り、無遠慮になつて、そして、その場句には、泣声、尖声を出しての大立廻。それ

も度重なつては、犬の喧嘩と振向いて見るものなく、女房の顔には殆ど生傷が絶えぬといふやうな寧ろ浅ましい境遇に陥つて行つた。

その結果として、折角身持が治り懸けた重右衛門が再び遊廓に足を踏み入れるやうに為り、少しく手を下し始めた荒廢した田地の開墾が全く委棄せられて了つたのも、これも余儀ない次第であらう。

し、この危機に処して、一家の女房たるものが、少しく伶俐であつたならば、狂瀾を既に倒るゝに翻し、危難を未だ来らざるに拒ぐは、さして難い事では無いのである。が、天は不幸なるこの重右衛門にこの纒かなる恩恵をすら惜んで与へなかつたので、尋常よりも尚数等愚劣なるかれの妻は、この危機に際して、あらう事が、不貞腐にも、夫の留守を幸ひに、山に住む獵師のあらくれ男と密通した。

そして、その露頭した時、

「だつて、その位は当たり前だ。お前さアばか、勝手な真似して、己ら尤められる積はねえだ」

とほざいた。

重右衛門は怒つたの、怒らないのツて、

「何だ、この女！」あま

と一喝して、いきなり、その髪を執つて、引摺倒し、拳の痛くなるほど、滅茶苦茶に撲つた。そして半死半生になつた女房を尻目にかけて、其儘湯田中へと飛んで行つた。そして、酒……酒……酒。

で、これからと言ふものは、重右衛門は全く身を持崩して了つたので、女郎買を為るばかりではない、悪い山の獵師と墾意に為つて、賭博を打つ、喧嘩を為る、茶屋女を買ふ、瞬く間にその残つて居る田地をも悉く人手に渡して、猶其上に宅地と家屋敷を抵当に、放蕩費を借りようとして居るのだが、誰もあんな無法者に金を貸して、抵当として家屋敷を押へた処が、跡で何んな苦情を持出さぬものでもない、恐毛振つて相手に為ぬので、そればかりは猶其後少時、かれの所有権ある不動産として残つて居た。

ある時かういふ奇談がある。

かれはその三日前ばかりから、湯田中に流連して、いつもの馴染を買つて居たが、さて帰らうとして、それに払ふべき金が無い。仕方が無いから、苦情やら忌味やらを言はれ、三里の山道を妓夫を引張つて遣つて来て見ると家の道具はもう大方持出して叩き売つて仕舞つたので、これと言つて金目なものは一つも無い。妓夫は怒るし、仕末に困つて、

何うしようと思つて居ると、裏の馬小屋で、主人が居ないので、三日間食はずに、腹を減へらして居つた、栗毛の三歳が、物音を聞き付けて、一声高く嘶いないた。

「やア、まだ馬が居るア」

と言つて、平気でそれを曳ひきだ出して、飯をも与へずに、妓夫に渡した。そして、彼はその馬を売つた残りの金を費つかふべく、再び湯田中へと飛び出して行つたのである。

其事が誰言ふとなく村の者に伝つて、孫（祖父の口癖に言つた）が馬を引張つて来て、又馬を引張つて行かれたとよと大評判の種となつた。

それから、三年。かれが到たうとう頭家屋敷を抵当に取られて、忌いま々くしさの余あまりに、その家に火を放ち、露顕して長野の監獄に捕へらるゝ迄其間の行為は、多くは暗黒と罪悪とばかりで、少しも改善の面影おもかげを顕あらはさなかつたが、只ただ一度……只一度次のやうな事があつた。

それは何でも其家屋の抵当に入つてから後の事だ相だが、ある日かれは金を借ようと思つて、上塩山かみしほやまの上尾貞七あげをの家を訪ねた事があつた。この上尾貞七と謂いふのは、根本三之助などと同じく、一時は非常に逆境に沈ちんりん淪して、村には殆ど身を措おく事が出来ぬ程なに爲つた事のある男で、それから憤いきどほりを發して、江戸へ出て、廿年の間に、何う世の荒波を泳いだか、一万円近くの資産を作つて歸つて来て、今では上塩山第一の富豪かねもちと立てられる身

分である。重右衛門が訪ねると、快く面会して、その用向の程を聞き、言ふがまゝに十五円ばかりの金を貸し、さて真面目な声で、貞七が、「実はお前さんの事は、兼ねて噂うはさに聞いて知つて居つたが、生れた村といふものは、まことに狭いもので、とても其処に居ては、思ふやうな事は出来ない。私なども……覚えが有るが、村の人々に一度信用せられぬとなると、もう何んなに藻掻もがいても、とても其村では何うする事も出来なくなる。お前さんも随分村では悪い者のやうに言はれるが、何うだね、一奮発する気は無いか」

重右衛門は黙つて居る。

「私なども……それア、随分酷ひどい眼あに逢つた。親には見放される、兄弟には唾つばを吐き懸けられる、村の人にはてんから相手にされぬといふ始末で、夜逃よにげの様にして村を出て行つたが、其時の悲しかった事は今でも忘れない。あの倉沢の先の吹ふきあげ上の水の出で居る処があるが、あそこで、石に腰を懸けて、もうこれで村に帰つて来るか何どうだかと思つた時は、情なくなつて涙が出て、いつそこゝで死んで了はうかとすら思つた程であつた。けれど……思返して、何うせ死ぬ位なら、江戸に行つて死ぬのも同じだ、死んだ積りで、量見を入れかへて、働いて見よう……とてくゝと歩き出したが、それが私の運の開け始めで、それでまア、兎とに角かく今の身分に為つた……」

「私なんざア、駄目でござ……」

と重右衛門は言つたが、其顔はおのづから垂れて、眼からは大きな涙がほろ／＼と膝の上に着ちた。

「駄目な事があるものか。私などもお前さんの様に、其時は駄目だと思つた。けれどその駄目が今日のやうな身分になる始となつたぢやがアせんか。何でも人間は氣を大きくしなければ好けない」

答の無いのに再び言葉を續いで、

「村の奴などは何とでも勝手に言はせて置くが好い。世の中は広いのだから、何も村に居なければならねえと言ふのもねえ、男と生れたからにや、東京にでも出て一旗挙げて来る様で無けりや、話にも何にも為らねえと言ふ者だ……」

重右衛門は殆ど情に堪へないといふ風で潮の如く漲つて来る涙を辛うじて下唇を咬みつゝ、押へて居た。

「本当でございすよ、私は決して自分に覚えの無え事を言ふんぢやねえんだから、……本当の一つ奮発さつしやれ、屹度それや立身するに極つてるから」

「私は駄目でござ……」と涙の込み上げて来るのを押へて、「私ア、とても貴郎の真似は

出来ねえでござす。一体、もうこんな体格からだでござすだで」

「そんな事はあるものか」と貞七は口では言つたが、成程それで十分に奮発する事も出来ないのかと思ふと、一層同情の念が加はつて、愈いよ慰藉あしやして遣らずには居られなくなつた。

「本当にそんな事は無い。世の中にはお前さんなどよりも数等利きかぬ体で、立派な事業を為した人はいくらもある。盲目めくらで学者になつた塙はな検けん校こうと言ふ人も居るし、跛足びつこで大金持に為つた大おほ俣またの惣七といふ男もある。お前さんの体位で、そんな弱い事を言つて居ては仕方がない。本当に一つ……遣つて見さつしやる気は無えかね。私ア、東京にも随分知つてる人も居るだて、一生懸命に為る積なら、いくらも世話は為て遣るだが」

「難ありがた有い、さう仰おつしやつて下さる人は、貴郎ばかり。決して……決して」と重右衛門は言葉ことばを涙につかへさせながら、「決して忘れない、この御厚恩は！ けれど私ア、駄目だめでござす。体格からださへかうでなければ、今までこんなにして村にまごくして居るんぢや御座ごアせんが……。私は駄目だめでござす……」

と又涙をほろ／＼と落した。

これは貞七の後での話だが実際その時は気の毒に為つて、あんな弱い憐れむべき者を村では何故なぜあのやうに虐待するのであらう。元はと言へば氣ばかり有つて、体が自由になら

ぬから、それで彼様な自暴自棄な真似を為るのであるのに……と心から同情を表さずには居られなかつたといふ事だ。実際、重右衛門だとして、人間だから、今のやうな乱暴を働いても、元はその位のやさしい処があつたかも知れない。けれどその体の先天的不備がその根本の悪の幾分を形造つたと共に、その性質も亦その罪惡の上に大なる影響を与へたに相違ないと、自分は友の話を聞きながら、つくづく心の中に思つた。

*

*

*

此後の重右衛門の歴史は只々驚くべき罪惡ばかり、抵当に取られた自分の家が残念だとして、火を放つて、獄に投ぜられ、六年経つて出て来たが、村の人の幾らか好くなつたらうと望を属して居たのにも拘らず、相変らず無頼で、放蕩で後悔を為るところか一層大胆に悪事を行つて、殆ど傍若無人といふ有様であつた。其翌年、賭博現行犯で長野へ引かれ、一年ほどまた臭い飯を食ふ事になつたが、二度目に歸つて来た時は、もう村でも何うする事も出来ない程の悪漢に成り済して、家も無いものだから今の堤下に乞食の住むやうな小屋を造つて、其処に氣の合つた悪党ばかり寄せ集め、米が無くなると、何処の家

にでもお構ひなしに、一升米を貸して呉れ、二升米を貸して呉れと、平気な面して貰ひに行く。そして、少しでも厭な素振を見せると、それなら考があるから呉れなくても好いと威嚇おどすのが習ならひ。村方では又火でも放つけられては……と思ふから、仕方なしに、言ふまゝに呉れて遣る。すると好氣いきに為つて、幅はばで、大風呂敷を携たづへて貰つて歩くといふ始末。殆ど村でも持余した。それがまだ其中は好かつたが、ある時ふと其感情を損そねてからと言ふものは、重右衛門大童おほわらはになつて怒つて、「何だ、この重右衛門一人、村で養つて行けぬと謂いふのか。そんな吝けちくさい村だら、片端から焼払つて了へ」

と酔客の如く大声で怒鳴つて歩いた。

で、今回の放火騒動ひつけさわぎ。

九

山県の家やまがたの全焼したあくる日は、益々警戒に警戒を加へて、重右衛門の行為は勿論もちろん、その娘ツ子の一挙一動、何処どこに行つた、彼処かしこに行つたといふ事まで少しも注意を怠らなかつた。否、消防の人数を加へ、夜番の若者を増して、十五分毎には柝ひやうしぎ木と忍びとが代

る／＼必ず廻つて歩くといふ、これならば何んな天魔でも容易に手を下す事が出来まいと思はれる許ばかりの警戒を加へて居て、それは中々一通の警戒ではないのであつた。であるのに、その厳ばうぎよせんしい防禦線の間を何う巧たくみに潜つてか、其夜の十時少し過ぎと云ふに、何か變な臭ひがすると思ふ間もなく、ふすくと怪しい音がするので、まだ今寝たばかりの雨戸を繰つて見ると、これはそも驚くまじき事か、火の粉こが降るやうに満面に吹き附けて、すぐ下の家屋の窓からは、黒く黄きいろい烟と赤い長い火の影とが……

「火事だ、火事だ」

とこの世も終りと云はぬばかりの絶望の叫喚さけびが凄すさましく聞えた。

自分は慌あわてて、跣はだし足で庭に飛び出した。下の家とは僅わずか十間位しか離れて居らぬので、母屋おもやでは既に大騒を遣つて居る様子で、やれ水を運べの桶をけを持つて来いのと老主人が声を限りに指揮さしつする氣勢けはひが分はつきり明と手に取るやうに聞える。自分もこの危急の場合に際して、何か手助になる事も思つて、兎とに角母屋の方に廻つて見たが、元より不知案内の身の、何う為る事も出来ぬので、寧むしろ足手纏あしてまとひに為らぬ方が得策と、其そのまゝ儘土蔵の前の明地あきちに引返して、只々たゞくその成行を傍觀して居た。

昨夜と均ひとしく、月は水の如く、大空に漂つて、山の影はくつきりと黒く、五六歩前くさむらの叢

にはまだ虫の鳴く音が我は顔に聞えて居る。その寂かな村落にもくくと黒く黄いろ煙が立昇つて、ばちくと木材の燃え出す音！ 続いて、寺の鐘、半鐘の乱打、人の叫ぶ声、人の走る足音！

村はやがて鼎の沸くやうに騒ぎ出した。

十

母屋の大広間で恐しく鋭い尖声とがりこゑが為たと思ふと、

「何だと……何と吐かした？ この藤田重右衛門に……」

と叫んだ者がある。

自分の傍に来て居た友は、

「重右衛門が来て居る！ 自分で火を点けて置いて、それで知らん顔で、手伝酒を食つてるとは凶太いにも程がある」

と言つた。

火は幸にも根本の母屋には移らずに下の小さい家屋一軒で、兎に角首尾よく鎮火したので、

手伝ひに来て呉れた村の人々、唧筒ポンプの水にずぶ濡れになつた村の若者、それから遠くから聞き付けて見舞に来て呉れた縁者などを引留めて、村に慣例しきたりの手伝酒を振舞つて居るところであるが、その十五畳の大広間には順序次第もなく、荒くれた男がずらりと並んで、親碗かぶで酒を蒙つて居るものもあれば、茶碗でぐびぐび遣つて居る者もある。さうかと思ふと、さもく腹すが空いて仕方が無いと言はぬばかりに一生懸命に飯を茶漬にして掻込んで居るもの、胡坐あぐらを搔いて烟草たばこをすぱりく遣つて御座るもの、自分は今少し前、一寸ちよつと其席のぞを覗いて見たが、それはく何とも形容する事の出来ぬばかりの殺風景で、何だか鬼共の集り合つた席では無いかと疑はれるのであつた。いづれも火の母屋おもやに移らぬ事を祝しては居るが、連夜の騒動に、夜は大眠らぬ疲労つかれと、烈しく激昂げきかうした一種の殺氣ころもとが加はつて、何の顔どを見ても、不穩な落付かぬ凄すしい色を帯びて居らぬものは、一人も無かつた。それが、自分が覗のぞいてから、大方一時間にもなるのであるから、酒も次第にその一座に廻つたと覺しく、恐ろしく騒ぐ氣勢けいひが其次の間に満ち渡つた。

「来てるのかね？」

と自分は友の言葉を聞いて、すぐ訊たづねた。

「来てるですとも……奴ア、これが楽しみで、この手伝酒を飲むのが半分目的で火をつける

のですア」

暫くすると、

「何だと、この重右衛門が何うしたと……この重右衛門が……」

といふ恐ろしく尖つた叫声が、その次の大広間から聞える。

「先生……また酔つたナ」

と友は言つた。

次の間で争ふ声！

「何に、貴様が火を放けると言つたんぢやねえ。貴様が火を放けようと、放けまいと、それになあ、れにやちやんと、政府といふものがある。貴様も一度は、これで政府の厄介に為つた事が有るぢやねえか」

かう言つたのは錆びのある太い声である。

「何だと、……己が政府の厄介に為らうが為るまいが、何も奴等の知つた事つちや無えだ。

何が……この村の奴等……（少時途絶えて）この藤田重右衛門に手向ひするものは一人もあるめい。かう見えても、この藤田重右衛門は……」

と腕でも捲つたらしい。

「何も貴様が豪くねえと言ひやしねえだア、貴様のやうな豪い奴が、この村に居るから困るつて言ふんだ」

「何が困る……困るのは当り前だ。己がナ、この藤田重右衛門がナ、態々困るやうにして遣るんだ」

非常に酔つて居るものと見える。

「酔客を相手にしたつて、仕方が無えから、よきつせい」

と留める声とする。

暫時沈黙。

「だが、重右衛門ナア、貴様も此村で生れた人間ぢや無えか、それだアに、此様に皆々に爪弾されて……悪い事べい為て居て、それで寢覚が好いだか」

と言つたのは、前のとは違つた、稍老人らしい口吻。

「勝手に爪弾しやアがれ、この重右衛門様はナ、奴等のやうなものに相手に為れねえでも……ねつから困らねえだア……べら棒め、根本三之助などと威張りやアがつて元ア、賽銭箱から一文二文盗みやがつたぢやねえだか」

「撲つて了へ」

と傍から憤怒に堪へぬといふやうな血氣の若者の叫喚が聞えた。

「撲れ！ 撲れ！」

「取占めて了へ」

と彼方此方から声が懸る。

「何だ、撲れ？」と。こいつは面白れえだ。この重右衛門を撲るものがあるなら撲つて見ろ！」

と言ふと、ばら／＼と人が撲ちに蒐つた様な氣勢が為たので、自分は友の留めるのを振り解いて、急いで次の間の、少し戸の明いて居る処へ行つて、そつと覗いた。いづれも其方へのみ気を取られて居るから、自分の其処に行つたのに誰も氣の付く者は無い。自分の眼には先烟の籠つた、厭に蒸熱い空氣を透して、薄暗い古風な大洋燈の下に、一場の凄じい光景が幻影の如く映つたので、中央の柱の傍に座を占めて居る一人の中老漢に、今しも三人の若者が眼を瞋らし、拳を固めて、勢猛に打つて蒐らうとして居るのを、傍の老人が頻りにこれを遮つて居るところであつた。この中老漢、身には殆ど断々になつた白地の浴衣を着、髪を蓬のやうに振乱し、恐しい毛驢を頓着せずに露はして居るが、これが則ち自分の始めて見た藤田重右衛門で、その眼を瞋らした赤い顔には、まことに凄

じい罪悪と自暴自棄との影が宿つて、其半生の悲惨なる歴史の跡が、一々その陰險な皺しわの中に織り込まれて居るやうに思はれる。自分は平生へいぜい誰でも顔の中に其人の生しやう涯がいが顕あらはれて見えると信じて居る一人で、悲惨な歴史の織り込まれた顔を見る程心を動かす事は無いのであるが、自分はこの重右衛門の顔ほど悲惨極まる顔を見た事は無いとすぐ思つた。稍老やいた顔の肉は太く落ちて、鋭い眼の光の中に無限の悲しい影を宿しながら、じつと今打ちに蒐からうとした若者の顔を睨にらんだ形状は、丸で餓うゑた獣の人に飛とび蒐からうと氣構へて居るのと少しも變つた所は無い。

「酔よつぱら客ひを相手にしたつて仕方が無えだ！ 廃よさつせい、廃よさつせい！」

と老人は若者を抑へた。

「撲なぐるとは、面おも白しれいだ、この藤田重右衛門を撲れるなら、撲つて見ろ、奴等うぬらのやうな青二才とは」

と果して腕を捲まくつて、体をくるりと其方へ回した。

「管かまはんで置くと、好い氣に為なるだ。此奴の為めに、村中大騒を遣つて、夜も碌ろく々く寝られねえに、酒を食くらはせて、勝手な事を言はせて置おくつて言ふ法は無ねえだ。駐在所で意氣地が無なくつて、何うする事も出来ねえけりや、村で成敗せいばいするより仕方が無えだ。爺とつさん

退かつせい、放さつせい」と二十一二の体の肥つた、血氣の若者は、取られた袂たもとを振放つて、いきなり、重右衛門の横よこ面つらを烈しく撲つた。

「此奴こいつ！」

と言つて、重右衛門は立上つたが、其儘そのまゝその若者に武者振り付いた。若者は何のと金剛力を出したが、流石さすがは若者の元氣に忽たちまち地重右衛門は組伏せられ、火のごとき鉄拳てつけんは霰あられとばかりその面上頭上に落下するのであつた。

見兼ねて、老人が五六人寄つて来て、兎に角この組討は引分けられたが、重右衛門は鉄拳を食ひし身の、いつかなこの仲裁を承知せず、よろ／＼と身体からだをよろめかしながら、猶なほ其相手に喰つて蒐からうとするので、相手の若者は一先ひとまつ其儘次の間へと追遣られた。

「おい、人を撲なぐらせて、相手を引込ませるつて言ふ法は何所どこにあるだ。おい、こら、相手をさせ、出さねえだか」

と重右衛門は烈しく咆哮ほうかくした。

今出すから、まア一先ひとまつ坐まんなさいと和なだめられて、兎に角再び席せきに就ついたが、前の酒を一息あふに仰あつて、

「おい、出さねいだか」

と又叫んだ。

相手に為るすものが無いので、少時しばし頭を低たれて黙もくつて居たが、ふと思出したやうに、「おい出さんか。根本三之助！ 三之助は居ないか」

と云つて、更に又、

「酒だ！ 酒だ！ 酒を出せ」

と大声で怒鳴どなつた。

云ふが儘に、酒が運んで来られたので、今撲なぐられた憤怒いかりは殆ど全く忘れたやうに、余念なく酒を湯呑茶碗で仰あふり始めた。かうなつて、構かまはずに置いては、始末にいけぬと誰も知つて居るので、世話役の一人が立上つて、

「重右衛門！ もう沢山たくさんだから帰らうではねえか、余り飲んでは体に毒だアで……」
と其傍そばに行つた。

「体に毒だと……」首をぐたりとして、「体に毒だアでと、あんでも好いだ。帰るなら奴う等ぬら帰れ。この藤田重右衛門は、これから、根本三之助と」

舌ももう廻らぬ様子。

「まア、話ア話で、後で沢山云ふが好いだ。こんなに意気地なく酔つて居ながら、帰らね

えとは、余り押が強過ぎるぢやねえだか」

と世話役は、其儘両手を引張つて、強ひてこの酔漢を立上らせようとした。けれど大磬石の如く腰を据ゑた儘、更に体を動かさうとも為ないので、仕方がなく、傍の二三人に助勢させて、無理遣りに其席から引摺上げた。

「何為やがる」

と重右衛門は引摺られながら、後の男を蹴らうと為た。が、夥しく酔つて居るので、足の力に繋りが無く、却つて自分が膳や椀の上に地響してと倒れた。

「おい、確りしろ」

と世話役は叫んで、倒れたまゝ愈起きまじとする重右衛門を殆ど五人掛りにて辛くも抱上げ、猶ぐづくに埋窟を云ひ懸くるにも頓着せず、Xの字にその大広間をよろめきながら、遂に戸外へと伴れ出した。

一室は俄かに水を打つたやうに静かになつた。今しも其一座の人の頭脳には、云ひ合さねど、いづれも同じ念が往來して居るので、あの重右衛門、あの乱暴な重右衛門さへ居なければ、村はとこしへに平和に、財産、家屋も安全であるのに、あの重右衛門が居るばかりで、この村始まつて無いほどの今度の騒動。

いつそ……

と誰も皆思つたと覺しく、一座の人々は皆意味有り氣に眼を見合せた。

あゝこの一瞬！

自分はこの沈黙の一座の中に明かに恐るべく忌むべく悲しむべき一種の暗潮の極めて急速に走りつゝあるのを感じたのである。

一座は再び眼を見合せた。

「それ！」

と大黒柱を後に坐つて居た世話役の一人が、急に顎あごで命令したと思ふと、大戸おもとに近く座を占めた四五人の若者が、何事か非常なる事件でも起つたやうに、ばら／＼と戸外へ一散に飛び出した。

*

*

*

二十分後の光景。

自分は殆ど想像するに堪へぬのである。

諸君は御存じであらう。自分が始めてこの根本家を尋ねた時、妻君が頻りに、鋤、鍬等を洗つて居た田池——其周囲には河骨、撫子などが美しくその婉らしい影を涵して居た纒か三尺四方に過ぎぬ田池の有つた事を。然るに其田池の前には、今一群の人が黒く影をあつめて居て、その傍には根本家と記した高張提燈が、月が冴々しく満面に照り渡つて居るにも拘はらず、極めて臙げに立てられてあるが、自分はそれと聞いて、驚いて、其傍に駆付けて、その悲惨なる光景を見た時は、果して何んな感に撲たれたであらうか。諸君、其三尺四方の溝のやうな田池の中には、先刻大酔して人に扶けられて戸外へ出たかの藤田重右衛門が、殆ど池の広さ一杯に、髪を乱だし、顔を打伏して、丸で、犬でも死んだやうになつて溺れて居るではないか。

「一体何うしたんです」

自分は激して訊ねた。

「何アに、先生、えら 酔 殺 たもんだで、遂ひ、陥り込んだだア」

と其中の一人が答へた。

「何故揚げて遣らなかつた！」

と再び自分は問うた。

誰も答へるものが無い。

けれどこれは訊ねる必要があるか。と自分は直ぐ思つたので、其儘押黙つて、そつとその憐れな死骸に見入つた。月は明らかに其田池を照して、溺れた人の髪の毛の散乱せるあたりには、微かな漣が、きら／＼と美しく其光に燦めいて居る。一間と離れた後の草叢には、鈴虫やら、松虫やらが、この良夜に、言ひ知らず樂しげなる好音を奏でてゐる。人の世にはこんな悲惨な事があるとは、夢にも知らぬらしい山の黒い影！

「あゝ、これが、この重右衛門の最後か」

と再び思つた自分の胸には、何故か形容せられぬ悲しい同情の涙が鎧に立つ矢の蝟毛の如く簇々と烈しく強く集つて来た。

で、自分は猶少時其池の畔を去らなかつた。

十一

「人間は完全に自然を發展すれば、必ずその最後は悲劇に終る。則ち自然その者は到底現世の義理人情に触着せずには終らぬ。さすれば自然その者は、遂にこの世に於て不

自然と化したのか」

と自分は独語した。

「六千年来の歴史、習慣。これが第二の自然を作るに於て、非常に有力である。社会はこの歴史を有するが為めに、時によく自然を屈服し、よく自然を潤色する。けれど自然は果して六千年の歴史の前に永久とこしへに降伏し終るであらうか」

「或は謂いふかも知れぬ。これ自然の屈伏にあらず、これ自然の改良であると。けれど人間は浅薄なる智と、薄弱なる意とを以て、如何いかなるところにまで自然を改良し得たりとするか」

「神あり、理想あり、然れどもこれ皆自然より小なり。主義あり、空想あり、然れども皆自然より大ならず。何を以てかくいふと問ふ者には、自分は箇人こじんの先天的解剖をすゝめようと思ふ」

少時しばらく考へて後、

「重右衛門の最期さいごもつまりはこれに帰するのではあるまいか。かれは自分の思まふ儘、自分の欲する儘、則ち性能の命令通りに一生を渡つて来た。もしかが、先天的に自我一方の性質を持つて生れて来ず、又先天的にその不具の体格を持つて生れて来なかつたならば、

それこそ好く長い間の人生の歴史と習慣とを守り得て、放恣なる自然の発展を人に示さなくつても済むのであらうが、悲む可し、かれはこの世に生れながら、この世の歴史習慣と相容るゝ能はざる性格と体とを有つて居た」

「殊に、かれは自然の発展の最も多かるべき筈にして、しかも歴史習慣を太甚しく重んずる山中の村——この故郷を離るゝ事が出来ぬ運命を有して居た」

と思ふと、自分が東京に居て、山中の村の平和を思ひ、山中の境の自然を慕つたその愚かさが分明自分の脳に頭はれて来て、山は依然として太古、水は依然として不朽、それに対して、人間は僅か六千年の短き間にいかにその自然の面影を失ひつゝあるかをつく／＼嘆ぜずには居られなかつた。

「けれど……」

と少時して、

「けれど重右衛門に対する村人の最後の手段、これとて人間の所謂不正、不徳、進んでは罪惡と称すべきものの中に加へられぬ心地するは、果して何故であらう。自然……これも村人の心底から露骨にあらはれた自然の発展だからではあるまいか」

此時ゆくりなく自分の眼前に、その沈黙した意味深い一座の光景が電光の如く顕れて

消えた。続いて夜の光景、暁の光景、ことに、それと聞いて飛んで来た娘つ子の驚愕。

「爺様、嘸ぞ無念だつたべい。この仇ア、己ア、屹度取つて遣るだアから」

と怪しげなる声を放つて、其死体に取附いて泣いた一場の悲劇！

其鋭い声が今も猶耳に聞える。

午後になつて、漸く長野から判事、検事、などが、警察官と一緒に遣つて来て臨検したが、その溺死した田池がいかにも狭く小さいので、いかに酔つたからとて、こんな所で独りで溺れるといふ訳は無い。これには何か原因があるであらうと、中々事情が難かしくなつて、其時傍に居た二三人は、事に寄ると長野まで出なければならぬかも知れぬといふ有様。それにも拘らず溺死者の死体は外に怪しい箇所も無いので、其儘受取人として名告つて出たかの娘つ子に下渡された。

半日水中に浸けてあつたので、顔は水膨れに気味悪くふくれ、眼は凄じく一所を見つめ、鼻涙は半開いた口に垂れ込み、だらりと大いなる辜丸をぶら下げたるその容体、自分は思はず両手に顔を掩つたのであつた。

「それにしても、娘つ子はあるの死骸を何うしたであらう。村では、あの娘つ子の手にも其死骸のある中は、寺には決して葬らせぬと言つて居つたが……」

かう思つて自分は戸外おもてを見た。昨夜の月に似もやらぬ、今日は朝より曇り勝にて、今降り出すか降り出すかと危んで居たが、見ると既に雨になつて、打渡す深緑こころは悉くま湿うるひ、灰色の雲は低く向ひの山の半腹までかゝつて、夏の雨には似つかぬ、しよぼくと烟けむるがごとき糠ぬか雨あめの侘わびしさは譬たとへやうが無い。

其処へ根本が不意に入つて来た。

検死事件で一寸手離されず、彼方あつち此方こつちへと駈走つて居たが、漸やうやく何うにかなりさうになつたので、一先ひとまつ体を休めに歸つて来たとの事であつた。

「何うだね?」

と聞くと、

「何アに、其様そんなに心配した程の事は無えでござす。警官も奴の悪党の事は知つて居るだアで、内々は道理もつともだと承知してゐるでござすが、其処は職掌で、さう手軽く済ませる訳にも行かぬと見えて、それで彼様あんな事を言つたんですア」

「それで死骸は何うしたね」

「重右衛門のかね。あの娘あまつ子が引取つて行つたけれど、村では誰も構ひ手が無し、遠い親類筋のものは少しはあるが、皆な村を憚はげつて、世話を為しようと云ふものが無えので、娘あま

つ子非常に困つて居たといふ事です……。けれど、今途中で聞くと、娘つ子奴、一人で、その死骸を背負つて、其小屋の裏山にのぼくつて、小屋の根太やら、扉やらを打破して、火葬にしていると云ふ事だが……此処から烟位見えるかも知れねえ」

と言つて向ふを見渡した。

注意されて見ると、成程、三峯の下の小高い丘の深緑の上には、糠雨のおぼつかなき髻髻の中に、一道の薄い烟が極めて絶え／＼に靡いて居て、それが東から吹く風にしへ西へと吹寄せられて、忽地雲に交つて了ふ。

「あれが、左様です」

と平気で友は教へた。

それが村で持余された重右衛門の亡骸を焼く烟かと思ふと、自分は無限の悲感に打れて、殆ど涙も零つるばかりに同情を濺がずには居られなかつた。「死はいかなる敵をも和睦させると言ふではないか。であるのに、死んだ後までも猶その死骸を葬るのを拒むとは、何たる情ない心であらう。そのあはれなる自然児をして、小屋の扉を破り、小屋の根太を壊して、その夫の死骸を焼く材料を作らせるとは、何たる悲しい何たる情ない事であらう」

自分の眼の前には、その獣の如き自然児が、涙を揮つて、その死骸を焼いて居る光景が

分明はつきり見える。下には村、かれ等二人が敵として戦つた村が横よこたはつて居るが、かの娘は果して何んな感を抱いてこの村を見下して居るであらうか。

「けれど重右衛門の身に取つては、寧ろこの少女の手——宇宙に唯一人の同情者なるこの自然児の手に親しく火葬せらるゝのが何んなに本意であるか知れぬ。否、これに増まさる導師は恐らく求めても他に在あるまい」

「村の人々、無情なる村の人々、死しても猶なほ和睦わくぼくする事を敢あへてせぬ程の冷ひやかなる村の人々の心！ この冷かなる心に向つて、重右衛門の霊は何うして和睦せられよう。さればその永久とこしへに和睦せられざる村人の寺に穩かに葬られて眠らんよりは、寧ろそのやさしき自然の儘まなる少女の手に——」

暗涙が胸も狭しと集つて来た。

「自然児は到底たうていこの濁つた世には容ゆるられぬのである。生れながらにして自然の形を完全に備へ、自然の心を完全に有せる者は禍わざはひなるかな、けれど、この自然児は人間界に生れて、果して何の音もなく、何の業わざもなく、徒いたづらに敗績はいせきして死んで了ふであらうか」

「否、否、否、——」

「敗績して死ぬ！ これは自然児の悲しい運命であるかも知れぬ。けれどこの敗績あたかは恰も

武士の戦場に死するが如く、無限の生命を有しては居るまいか、無限の悲壯を顕はしては居るまいか、この人生に無限の反省を請求しては居るまいか」

自分は深く思ひ入つた。

少時しばらくしてから、

「けれど、この自然児！ このあはれむべき自然児の一生も、大いなるものの眼から見れば、皆なその必要を以て生れ、皆なその職分を有して立ち、皆なその必要と職分とのために尽して居るのだ！ 葬る人も無く、獣のやうに死んで了つても、それでも重右衛門の一生は徒爾いたづらではない！」

と心に叫んだ。

何時去つたか、傍には既に友は居らぬ。

戸外の雨はいよく侘わびしく、雲霧は愁うれひの影の如くさびしくこの天地に充ち渡つた。丘の上の悲しい煙は、殆ど消ゆるかと思はるゝばかりに微かに、微かに靡なびいて居るが、村ではこれに対して一人も同情する者が無いと思ふと、自分は又簇むら々々と涙を催した。

あゝその雨中の煙！ 自分は何うしてこの光景を忘るゝ事が出来よう。

否——

諸君、自分は其夜更に驚くべく忘るべからざる光景に接したのである。自分は自然の力、自然の意のかほどまで強く凄じいものであらうとは夢にも思ひ懸けなかつた。其夜自分は早くから臥床ふしどに入つたが、放火の主犯者が死んで了つたといふ考へと、連夜眠らなかつた疲労つかれとは苦もなく自分を華胥くわしよに誘つて、自分は殆ど魂魄たましひを失ふばかりに熟睡して了つた。熟睡、熟睡、今少し自分が眼覚めずに居つたなら自分は恐らく全く黒焼に成つたであらう。自分の眼覚めた時には、既に炎々たる火が全室に満ち渡つて、黒煙が一寸先も見えぬ程に這つて居た。自分は驚いて、慌あわてて、寝衣ねまきの儘、前の雨戸を烈しく蹴つたが、幸さいはひにも閨しきぬの溝みぞが浅い田舎家の戸は忽たちまち地外はつれて、自分は一簇いちぞくの黒煙と共に戸外おもてへと押し出された。

押出されて、更に驚いた。

夢では無いかと思つた。

何うです、諸君。全村が丸で火※ 鎮守の森の蔭に一つ。すぐ前の低いところの一隅かたすみ

に一つ。後に一つ。右に一つ。殆ど五六ヶ所から、凄じい火の手が上つて、それが灰色の雨雲に映つて、寝惚けた眼で見ると、天も地も悉く火に包まれて了つたやうに思はれる。雨は歇んだ代りに、風が少し出て、その黒烟とその火とが恐ろしい勢で、次第に其領分をひろめて行く。寺の鐘、半鐘、叫喚、大叫喚※

自分は後の低い山に登つて、種々なる思想に撲れながら一人その悲惨なる光景を眺めて居た。

實際自分はさま／＼の経験をしたけれど、この夜の光景ほど悲壯に、この夜の光景ほど莊嚴に自分の心を動かしたことは一度も無かつた。火の風に伴つて家から家に移つて行く勢、人のそれを防ぎ兼ねて折々発する絶望の叫喚、自分はあの刹邪こそ確かに自然の姿に接したと思つた。

諸君！ これでこの話は終結である。けれど猶一言、諸君に聞いて貰はなければならぬ事がある。それは、その翌日、殆ど全村を焼き尽したその灰燼の中に半焼けた少女の死屍を発見した事で、少女は顔を手に当てたまゝ打伏に為つて焼け死んで居た。かれは人に捕へられて、憎悪の余、その火の中に投ぜられたのであらうか、それとも又、独り微笑んで身をその中に投じたのであらうか。それは恐らく誰も知るまい。

自分は其翌日万感を抱いてこの修羅しゆらの巷ちまたを去つた。

それからもう七年になる。

其村の人々には自分は今も猶交際して居るが、つい、此間も其村の冒険者の一人が脱走して自分の家を尋ねて来たから、あの後は村は平和かと聞くと、「いや、もうあんな事は有りはしねえだ。あんな事が度々たびく有つた日には、村は立つて行かねえだ。御方便な事には、あれからはいつも豊年で、今です、村了、あの時分より富貴かねもちに為つただ」と言つた。そして重右衛門とその少女との墓が今は寺に建てられて、村の者がりくかうげ香花たむを手向けるといふ事を自分に話した。

諸君、自然は竟つひに自然に歸つた！

(明治三十五年五月)

青空文庫情報

底本：「筑摩現代文学大系 6 国木田独歩 田山花袋集」筑摩書房

1978（昭和53）年11月25日初版第1刷発行

1980（昭和55）年2月20日初版第2刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力者：kompass

校正：伊藤時也

2004年8月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

重右衛門の最後

田山花袋

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>